



2016 ANNUAL REPORT

Aoyama Gakuin University Volunteer Station

2016年 年次報告書

青山学院大学 ボランティア・ステーション

青山学院大学ボランティア・ステーション 2016年次報告書

目次

ボランティア・ステーション団体概要	2
2016年活動場所一覧	3
ボランティア・ステーションのあゆみ	4
顧問挨拶	6
担当職員挨拶	7
学生代表挨拶	8
1.塩竈プロジェクト	9
学童保育・サマースクール・けやき教室・漁業支援・農業支援・PR動画	
2.陸前高田プロジェクト	24
福祉支援・地域支援・お祭り支援	
3.熊本プロジェクト	32
仮設住宅支援・ボランティアセンター運営・ユニットハウス村	
4.ネパールプロジェクト	39
5.インドネシアプロジェクト	42
6.フィリピンプロジェクト	45
7.M4Rプロジェクト	48
8.地域部の活動	51
渋谷区清掃活動・えびす青年教室・GAYA	
9.学内の活動	56
10.卒業学年報告	59
学生スタッフ一覧	65
お世話になった皆様	66

青山学院大学ボランティア・ステーション

団体概要

青山学院大学ボランティア・ステーションは、社会に奉仕・貢献したいという想いを持つ学生に対し、社会のニーズに合ったボランティアを提供し、私たちを含め青学生が「地の塩、世の光」となり、助け合って生きる世界を目指す学生団体です。

私たちは以下のような目標を掲げて活動を行っています。

- 1、3 SMILES（青学を、日本を、世界を笑顔に）を心がけ、行動します。
- 2、将来起こりうる災害や問題を想定し、ボランティアコーディネートできる人材になります。
- 3、社会で起きている問題に対して主体的に向き合い、行動できる人材になります。
- 4、社会において、人と人・地域と地域・意思と意志をつなぐ架け橋となり、多くの希望を生み出していきます。

組織体制



2016年活動場所一覧



ボランティア・ステーションのあゆみ

2011年

- 3月 東日本大震災
- 5月 青山学院大学ボランティア・ステーション
- 7-9月 石巻市ことぶき町商店街通り街路復興支援
(のべ125名の学生・教職員が、商店街のブロック街路(125m)を完全復旧)
多賀城市留守宅児童学級支援
気仙沼市階上中学校教育支援
大船渡市長洞仮設住宅コミュニティ支援
- 11月 陸前高田写真洗浄救済ボランティア (-12月)
(津波に流された写真を預かり、大学構内で洗浄・乾燥・アルバム挿入後返却)

2012年

- 1月 石巻スタディツアー
- 3月 陸前高田写真洗浄救済ボランティア
- 6月 山元町写真洗浄救済ボランティア
- 8-9月 石巻スタディツアー
塩竈 教育&浦戸諸島復興支援
陸前高田 写真救済&福祉&教育支援
気仙沼仮設住宅コミュニティ支援
フィリピン異文化交流
青山学院大学同窓祭(東北物産販売)

2013年

- 4月 キッズウィークエンド(福島子ども保養ツアー)参加
- 7月 渋谷区清掃ボランティア
- 8-9月 塩竈 教育&浦戸諸島復興支援
多賀城市立図書館復興支援
フィリピン異文化交流
青山学院大学同窓祭出店(東北物産販売)
- 11月 フィリピン台風災害支援募金活動
浦戸諸島かつらしまかき祭参加
伊豆諸島(台風26号)復旧ボランティア
- 12月 ネパール支援ボランティア

2014年

- 1月 塩竈ウィンタースクール
- 2月 ネパール支援ボランティア
- 2月 フィリピン台風支援募金 募金箱設置(-5月)
- 4月 渋谷区清掃ボランティア
多賀城市立図書館への児童書寄贈(-9月)
- 5月 気仙沼ワークショップ
- 8-9月 塩竈 サマースクール&保育&浦戸諸島復興支援&WEB,PR動画活動
陸前高田 陸前高田思い出の品&教育支援&福祉支援&スタディツアー
伊豆大島 海岸清掃活動&「元町じまん」マップ作成&スタディツアー
フィリピン 異文化交流
青山学院大学同窓祭(東北物産販売)
- 10月 シティプロモーションサミット

2015年

- 2月 ネパール 衛生教育&クリーンアップキャンペーン
陸前高田 教育&地域支援
- 3月 塩竈 学童保育
- 5月 ネパール地震救援募金(-6月)
- 6月 ボランティアフォーラム開催
- 8月 塩竈 保育&学童&サマースクール&けやき教室&防災ディスカッション
農業&漁業&PR動画
陸前高田 教育&地域&福祉支援&スタディツアー
- 9月 インドネシア 幼稚園・小学校訪問&衛生教育
フィリピン 異文化交流&教育支援
青山学院大学同窓祭(東北物産販売)
- 10月 M4R(Meal for refugees)の実施
- 11月 かき祭りに参加
- 12月 渋谷区清掃実施

2016年

- 2月 ネパール クリーンアップキャンペーン&NGO訪問
- 3月 陸前高田 地域支援&福祉支援
塩竈 学童保育
- 4月 AGUくまもと応援募金(-5月)
ボランティアフォーラム開催
- 6月 渋谷区清掃実施
- 7月 AGUくまもと応援募金報告会
- 8-9月 塩竈 学童&けやき教室&サマースクール&農業&漁業
陸前高田 教育&地域&&お祭り&福祉支援&スタディツアー
熊本 復旧支援&コミュニティ支援
インドネシア 日本語&手洗い&たばこ&防災教育
フィリピン 異文化交流&教育支援
青山学院大学同窓祭(東北・熊本物産販売)
- 10月 渋谷区清掃実施
- 11月 M4R(Meal for refugees)実施
渋谷区清掃実施
- 12月 渋谷区清掃実施

※えびす青年教室・GAYAでの活動は記載していないが、8月以外毎月行っている。

顧問挨拶

AOYAMAのボランティア・スピリットは次のステージへ

青山学院大学ボランティア・ステーション 顧問
ボランティアセンター 副センター長
高橋 良輔

2016年1月から顧問に就任し、月次報告でボランティア・ステーション(以下、ボラステ)の状況を聞いてまず驚いたのは、ほとんど教員の指導やサポートがないまま、自発的に国内外での活動が続けている学生スタッフの熱意と努力でした。彼／彼女らは、夏季・冬季の活動計画のために文字通りの手弁当で被災地へ視察に赴き、行政や学校、企業やNPOなど多様なカウンターパートとの地道な調整を積み上げ、大学への提案では危機管理や予算に厳しいチェックを受けます。ようやく企画書・計画書が承認されると、次は一般の学生への参加募集の原稿を作り、応募者への事前説明会が開催できます。現地での活動が始まれば、ときに自炊もしながら毎晩の振り返りを重ね、翌日の企画実施のための準備にかかります。活動終了後は、その成果・課題・決算を報告書にまとめて大学に報告するのはもちろん、次世代のプロジェクト・リーダーへの引継ぎが始まります。活動地やプロジェクトによって内容の違いはあるものの、卒業のための単位にもならず、もちろんアルバイト代がでるわけでもない、そんなボランティア活動を今年も学生スタッフたちは自らの熱意と努力のもとで紡いできました。

それぞれのプロジェクトの詳細については、ぜひこの報告書をご覧くださいと思いますが、2016年度には学生の発案で新たに熊本の被災地支援や相模原での防災教育が立ち上がりました。4月中旬に熊本地震が発生すると、数日後には体育会学生本部などと連携して、延べ670名の募金活動を組織化し1ヶ月余りで150万円以上を集めたり、マス・メディアからの取材を受けたりしました。またしばらく活動が休止していた相模原キャンパスでは、二人の学生がゼロから防災教育の活動を企画し、専門性をもったNPOとの協力のもと、地域の学童保育との新たな関係も芽生えました。

こんなボラステも、2017年には大きな転機を迎えます。以前より検討されてきた大学ボランティアセンターが、ようやく2016年10月に青山キャンパスに開設されたのです。学生ユニットとしてのボラステもこのセンターに統合されることになりましたので、その意味ではボラステの活動報告は本書が最後になるでしょう。けれども2011年の東日本大震災以来、学生のイニシアティブのもとで積み上げられてきた諸活動は、もちろん終わりになるわけではありません。今後、ボラステの学生ユニットは「ルート」と名称を変え、これまで以上に「地の塩・世の光」となる活動を深化・拡大していくことが計画されています。2014年に公表されたAOYAMA VISIONは、「すべての人と社会のために未来を拓くサーバントリーダーの育成」を掲げました。是非、学生たちのボランティア活動にこれまで以上のご支援・ご助力をいただければ幸いです。

担当職員挨拶

政策・企画部
中尾 匠吾

ボランティアセンター設置に伴う組織改編により、ボランティア・ステーション(以下、ボラステ)としては今回が最後の活動報告書となります。2011年の東日本大震災を契機として立ち上がり、学生が主体となって活動を続けてきたボラステですが、ここまで活動を継続することができたのもひとえに皆様からの多大なるご支援によるものであり、深く感謝申し上げます。

私がボラステに携わった2年数か月あまり、近場では渋谷区での清掃活動や障がい者施設での支援活動、遠方では東北(塩竈、陸前高田)や熊本での復旧・復興支援活動など、できる限り現地へ足を運んだり活動を共にし、学生が考えていることや感じていることを同じ目線で理解しようと努めてきました。十分とは言えませんでした。そこで実感できたことは、ありきたりですが、ボランティア活動を通じた学生の成長です。

一口にボランティアと言っても、ボラステの活動はニーズ調査～企画～実施を含んでおり、多岐にわたります。ある学生はプロジェクトを統括してボランティア活動の企画・調整を一手に担い、ある学生は広報を担当してSNS等のメディアを利用した企画PR活動や活動報告を行い、ある学生は総務を担当して円滑な活動実施のための煩雑な事務処理を行うなど、それぞれに与えられた役割をこなします。当然、得られる知識や技能等はそれぞれ異なります。しかしながら、共通しているのは“現地のためとは何か”、“参加者にとっての意義とは何か”など、学生という時間的にも物理的にも制約のある立場ながらも常に悩み、真摯に考えながら自分にできることを見出していく、できることを増やすために必要だと思ったことを自発的に学んでいく、また他者との協力関係を構築していくことであり、そのようにして培われる内面的な能力こそがボラステの活動から共通して得られる成長だと思います。

近年、社会問題となっている子供の貧困対策として“非認知能力”養成の重要性が注目され、教育関連では学習指導要領上での“生きる力”、高大接続改革での“学力の3要素”、大学教育ではそれらの更なる伸長や“学士力”“社会人基礎力”といった言葉が話題となってきました。ボラステは、もちろん社会に貢献することを活動の第一義としていますが、まさに学生自身のこれらに通ずる能力の成長に寄与してきたのではないかと感じています。今後は、このような学生の主体的な活動を維持しつつ、教育機関としてより本学の方針に沿った形で学生の成長や社会貢献に資することができる組織の在り方や支援の仕組みを確立していくことが課題であると認識しています。

ボランティアセンターとして新たな形に変わってしまいましたが、引き続きボラステの良い面を保ちつつ、より多くの学生がボランティア活動に関心を持ち、本学の社会貢献活動の裾野を広げることができるよう教職員・学生スタッフ一同これからも尽力してまいります。皆様におかれましては今後とも変わらぬご指導・ご鞭撻を頂けよう、心からよろしくお願い申し上げます。

学生代表挨拶

2016年度 学生代表
日本文学科3年
大山明

前代表から、学生代表のバトンを受け継ぎ、いよいよ本格的に代表の任に就くのだと帯を締めた2016年の4月の出来事でした。熊本をはじめとする九州地方は、3日間で幾度とない大地震に見舞われます。他人事ではないと感じました。単純に、我々青山学院大学ボランティア・ステーションが東日本大震災を機に発足した団体だったから、というわけではありません。他人事ではないと感じたのには、別の理由がありました。

熊本で第一地震が発生した次の日、あるひとりの先輩から「動こう。」と声をかけられたことがきっかけで、弊団体の熊本へのアプローチが始まりました。例年ならば、新入生スタッフの受け入れ準備に充てていた期間に、急ピッチで熊本の企画を進めていきました。熊本の企画に代表としての思いを反映できた企画になったかは、今でもわかりませんが、彼がきっかけで広がっていった熊本の企画が、それに携わった人たちの思いがそのまま自分の熊本に対する思いになっていったことは確実です。代表とは何か、という答えが自分なりに見つかったような気がしました。こうした企画に携わる中で、代表のあり方を学ぶことができたと思っています。

さて、こういった立場にあると、ボランティアとは何かといった質問をしばしば投げられます。弊団体にとってのボランティアとは、一言でいうならば、人と人との繋がりで出来上がったものだとして認識しております。東日本大震災を機に、ボランティア活動の枝葉はどんどん広がっていきました。活動の経験が、新たな人の輪を紡いでいったわけです。そして、弊団体はその一度できた輪を途切れさせないような努力をしてまいりました。地域と共に歩みを進める団体、その団体の学生代表の任を賜ったことを、ここで改めて誇りに感じる次第です。

青山学院大学ボランティア・ステーションは、2016年度をもって組織体制が変更することに決まりました。2017年度以降は新体制で、ボランティア活動を企画・運営していくことになります。新体制に変わっても、人と人との繋がりを切らず、そして新たな輪を見つけるといった弊団体のあり方が引き継がれていくことを心より望んでおります。そして、そうあったなら、青山学院大学ボランティア・ステーション最後の学生代表としてこんなに幸せなことはございません。最後にはなりますが、今日も我々が平穏無事に活動を行えるのも、皆さまのおかげに他なりません。日頃よりご理解ご協力頂いている皆さまに、感謝と敬意の意を示すとともに、団体が変わりましてもご支援ご厚情を賜りますようお願いいたします。



塩竈プロジェクト

Shiogama project

実施期間

2016年3月28日～3月30日

8月6日～8月20日

学童保育(春)

活動場所：塩竈市立第一小学校

塩竈市立第三小学校

塩竈市立玉川小学校

活動期間：3月28日～30日

活動人数：8名

活動内容・背景



現在塩竈市の学童保育では、学童保育利用者の増加により先生方の人手が不足している。そのため、児童一人ひとりに対して先生方が向き合うことの出来る時間が減少している現状がある。そこで、私たち学生のボランティアが入りお手伝いをする事で、先生方が子どもたちと関わる時間をより多く持てるようにすることが目的である。さらに、外遊びなどの体力を必要とする遊びは先生方にとっては負担が大きいため、そういった学生だからこそ活躍できる遊びを一緒にすることで、普段とは異なる楽しさを感じてもらい、子どもたちの春休みが少しでも充実したものになるようにする。昨年の夏と同様に今回も私たちが遊びを企画し、イベントという形で実施した。文字が書かれたカードを並べるゲームを行ったが、普段と違う遊びに子どもたちは盛り上がっていた。また、昨年もお世話になった活動場所で再び活動を行うことで、現地との信頼関係を築き、今後も円滑に活動が行えるようにしている。

スタッフの所感

私が訪れた学童では、おやつや昼食の時間などの決められた時間以外は室内で自由に過ごしていた。私が男の子たちのグループで遊んでいると、その中の一人の子が宿題のドリルを持ってきたので、漢字や計算の問題を一緒に解いていた。問題が解けたときに私が褒めると、その子はとても嬉しそうな表情で、次の問題、また次の問題と、意欲的に取り組んでいた。私はこの時までは、正直先生方の人手不足というのはあまり感じていなかった。しかし、宿題を見てあげることやちょっとした話を聞いてあげることなど、些細なことだが子どもたちはそうした大人との関わりを必要としている気がした。

今回は新1年生の入学前で学童に来ている子どもたちも通常より少なかったが、学校が始まれば人数は増え、先生方の負担もさらに増えるだろう。短時間であったが私たちは教室の窓拭きのお手伝いもした。その際に先生方から、「普段はそんなことしている時間もないからとても助かる」と言ってもらい、改めてボランティアの必要性を感じた。

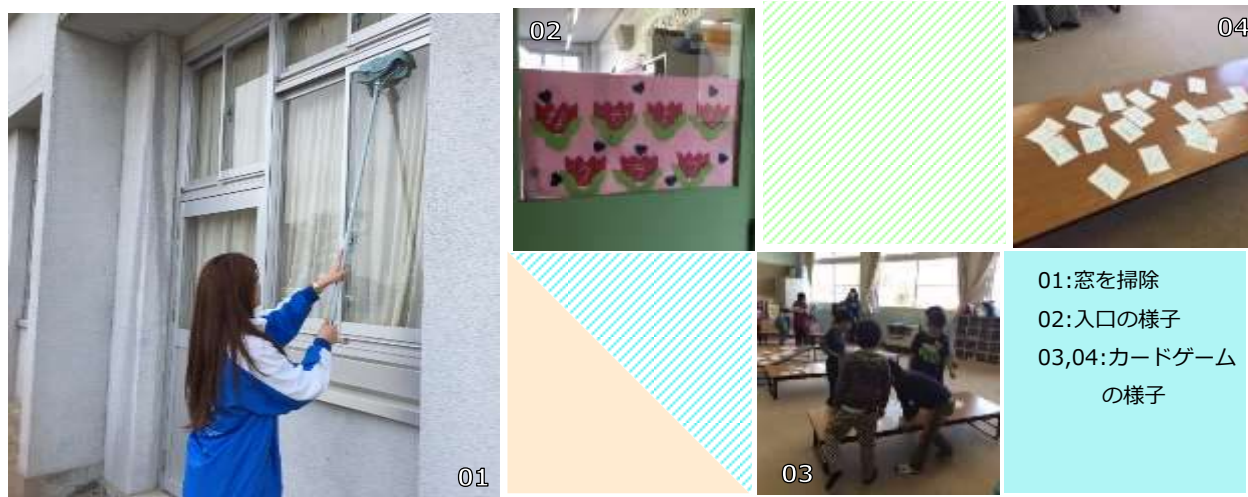
一時的な支援であるため、役に立っているのかどうか確信できない気持ちもあったが、少しの間でも先生方の負担を軽くできたり、家族でもなく先生でもない私たち大学生が子どもたちと交流したりすることは、お互いにとって意味があることなのではないかと実感した。

参加者の所感

今回初めて学童保育所に伺った。私自身、学童に通った経験がなく不安もあったが、学童に到着してすぐ、その不安は吹き飛んだ。ハツラツとした子どもたちがすぐに駆け寄ってきたからだ。子どもたちと共に遊ぶことがメインの活動であったが、子どもたちとゲームをしていると小学生と思えないほどゲームが強い。「何故だろう」と疑問に思ったが、その答えは意外と簡単に見つけることができた。それは、子どもたちは毎日同じゲームを繰り返し行っているからだ。何度も同じゲームを行っているため、強くなってしまいうようだ。今回、私たちは子どもたちのゲームのマンネリ化を脱却すべくイベントとして新たなゲームを行った。ボランティアが学童に行くことで、似たような日常を送る子どもたちに新しい風を吹かすことができたと感じた。

今後の展望

今回は伺った全ての学童で同じイベントを行ったが、「外遊びが好き」「大人しい子が多い」など、学童ごとにそれぞれの特色があることを改めて感じた。したがって、その学童での活動経験があるスタッフを中心に、その特色に合わせたイベントを工夫して行えたらより良い活動になるのではないかなと思う。また、前回と同じ活動場所を訪れることで、以前よりも先生方が子どもたちを私たちに任せて下さる場面が多く、信頼関係が深まっているように感じられた。そのことから、先生方・子どもたち・私たちボランティアの三者が、お互いに安心や信頼を感じられる関係を築いていけるよう、継続した活動を行っていきたい。



学童保育(夏)

活動場所：塩竈市立第一小学校 塩竈市立第二小学校
塩竈市立第三小学校 塩竈市立月見ヶ丘小学校
塩竈市立玉川小学校 塩竈市立杉の入小学校

活動期間：第1陣 8月8日～10日、12日
第2陣 8月18、19日

活動人数：23名



活動内容・背景

現在、塩竈市内の学童保育では東日本大震災の影響により共働きの家庭が増えたということ、さらに昨年4月から国の規定が変わったことによって受け入れ可能な児童の年齢を引き上げたことにより利用する児童が増えた。そのため指導員の人員が不足し児童一人ひとりと向き合う時間が取れていないのが現状である。そこで私たち大学生が夏期休暇の間だけでも介入することによって、指導員の方々の負担を軽減することを目的としている。

加えて毎日同じ遊びを繰り返し飽きている児童に対して、少しでも楽しい夏の思い出を残し持って帰ってもらえるように私たち大学生がイベントを企画した。今年から活動場所を3ヶ所増やし、計6ヶ所で児童との交流や学習支援を中心に活動を行った。児童との交流は主に仲良しクラブ室内と学校の校庭で一緒に遊んだ。室内では、毎日同じカードゲームやレゴ、お絵かきなどで遊んでいるため児童たちは飽きてしまっている様子がしばしば見受けられた。

今年度も昨年度に引き続き、1陣では紙染め、2陣では絵の具を使った工作を行うというイベントを実施した。他にも机や備品の整理、他のイベントの手伝い等を行った。

スタッフの所感

今回活動を行って、話で聞いている分には指導員の方の人員不足を実感することができず、本当に手助けになっているのかという疑問を抱いた。しかし学童に来ている児童は活発な子どもが多く、一人ひとり対応しながら事務作業を行う指導員の方を見てまだまだ私たちが手伝えることがあったと思った。さらに、学童に来ている児童たちは夏休みらしいことができていないという課題もある。大学生が学童の「日常」に入り込むことで「非日常」の特別感を作ることが出来るのではないかなと思う。両親が共働きであるなどの理由から、些細な出来事でもなかなか自分の話をできない子どもたちにとって、一人ひとりと向き合い少しでも話し相手や遊び相手になることが私たち大学生にできることであり、指導員の方の負担軽減へとつながり児童の心のケアにもなる。

私たちにできることは些細なことであっても、できることがある限り継続して活動を行っていきたいと改めて強く感じた。

参加者の所感

今回活動してみて感じたことは子どもたち一人ひとりに向き合うことの難しさである。考え方も性格もそれぞれ異なる子どもたちと向き合うことは自分が思っていた以上に難しく、常にどのように接していけばよいのかを考え、臨機応変に対応することが求められる活動であった。

子どもたちは私たちの言葉、態度ひとつひとつを素直に吸収し、児童一人ひとりの名前を呼ぶという行為1つを取っても大きな刺激となる。宿泊先に戻ったあとも、限られた活動期間の中で「子どもたちの思い出に残ることがしたい」と何が私たちにできるか考え、実際にその遊びを提案し、児童に楽しんでもらえたことは私にとって何よりも嬉しく貴重な経験となった。2陣は台風の影響で活動日数が少なくなり、当初予定していたイベントを行うことができない小学校もあった。私たちが学童保育に行くことでそのものが、いい意味で子どもたちの一定した生活の中に少しでも変化を与えられる一要素となればうれしい。

今後の展望

学童保育での活動は春の活動も含めて3回目になるが、活動をするたびに指導員の方が児童ときちんと時間をとって向き合うことができているということが目に見えてわかり、人手不足と苦労を感じる。

子どもたちと話していると震災から5年が経った今でも心の中の恐怖が消えていない様子が見受けられ、私たち大学生が児童たちの話に耳を傾け話し相手になったり、一緒に遊ぶことに意味があるのではないかと強く感じた。

同じ学校を訪れることで児童や指導員の方々との交流も深まり、信頼関係も築いていけるように感じる。これからも活動を継続していくことで児童たちの成長を見届けると同時に、沢山の思い出作りをしていきたいと考える。



サマースクール

活動場所：塩竈市立第一中学校

塩竈市立第二中学校

塩竈市立第三中学校

活動期間：第2陣 8月18、19日

活動人数：14名



活動内容・背景

子どもたちに対する全国学習力調査等でも下から3番目ほどの宮城県は、震災発生以降、家計の圧迫やそのストレスで学習環境が劣悪になったのは事実である。また、塩竈市には大学がなく、高校もわずか1校しかない。

その為、夏休みに中学校で行われるサマースクールにおいて学習指導を行うことにより、生徒の学力向上を目指す。午後には一緒に部活動へ参加し、生徒との様々な会話を通して距離を縮める。普段大学生と関わることの少ない塩竈市内の中学生と積極的にコミュニケーションを図り、様々なことを感じ取ってもらう。また大学生とはどのような存在なのか、大学とはどのような場所なのかを知ってもらい、中学生という今後のことを考え始めなければいけない時期に自分の将来を見据えるきっかけとなることを望む。また、新たな刺激を受け日々の学習意欲の向上へと繋げ、未来の可能性を広げる手助けを行う。

スタッフの所感

私はサマースクールに参加するにあたって勉強のアシストを行うのはもちろん、自分の経験を通して学生であることの価値、東京での出会いと魅力、目標に向けて努力することの大切さを伝えること、そして先生とのコミュニケーションを積極的に図ることを目標にして臨んだ。私は第三中学校の2年生を担当したが、1年生から進級したばかりということもあり勉強よりも部活に重きを置いている生徒が多く、高校受験のことなど考えたこともないと話す生徒もいた。学習面において、生徒に勉強の方法の効率化を提案するにしてもボランティアの身分でどの程度まで提言してよいのかという葛藤もあり、学力向上のお手伝いをするものの難しさを強く感じた。また、解答を教えることは簡単だが、そこに至るプロセスを指導することも難しい部分があった。しかし1日目にアドバイスした点が2日目に改善されていたのを見たときには生徒たちにとって私たちは先生として見られているのだという実感が湧いた。

2日間という期間の短さもあり課題も多く残ったが本来の目的である「生徒に刺激を与える」ことはわずかながら達成できたのではないかと感じている。さらに長期間行った際にはより良いものが生徒と学生の双方に得られる可能性を強く感じている。

参加者の所感

生徒たちは皆いい子で男子生徒は初日から話してくれ、2日目には女子生徒とも沢山話せ、親しく接してくれた。勉強の仕方やコツを説明する時間をもらうことができたので教育支援という面でもよかったと思う。2日間では伝えられることが少なかった為、もう少し長い期間行いたかった。地元の若い世代の子がある程度の知識を持つことは復興の力になれる可能性は大いにあると思うのでこの活動は大切だと思う。

2日間という短い期間だったが、自分にとって有意義な体験ができた。というのも、1日目終了した時点で何か問題があったか、原因は何か、どうアプローチしていくのかといった問題分析・解決の考え方、課題への糸口の見出し方を意見交換することで探り考えたからだ。そして、2日目には反省点を生かして同じことをしないように意識を変えることができた。

活動前は生徒にどう勉強を教えてよいのか分からず悩む部分も大きかったが、実際に行ってみると生徒はとても素直で教える側もやりやすかった。私としては教育支援や部活動への参加で生徒たちとコミュニケーションを取ることができ、大変有意義な活動となった。一方で担当する学年によっては質問があまりなく、不完全燃焼な想いを抱える人もいた。しかしそんな中で自ら改善方法を考え実行に移す姿勢が見られたのは良かったように思う。参加できて本当に良かった。

今後の展望

先生とお話する機会があり、塩竈市の教育の現状を話してくださった。そこからはサマースクールと部活動の2つを担当しなくてはならないほどの人員不足の問題があることを知った。また先生方からは私たちが来ることによって非常に助かっているという声も多く聞くことができた。また、前年も話した生徒との再会を果たした参加者もいたり、皆さんが私たちが快く受け入れて下さったことも非常に印象的だった。

このようなことから、今後も活動を行うことには意義があると思う。



けやき教室

活動場所：塩竈市適応指導教室（けやき教室）

活動期間：第1陣 8月8日～10日

活動人数：4名



活動内容・背景

はじめに、不登校問題は今や教育現場のみの問題ではなく、原因が多岐にわたることから社会的にも深刻な問題である。私たちが活動を行っている宮城県は、全国的にも小・中学校の不登校の児童・生徒の割合が高く、さらに塩竈市は宮城県内でも特に深刻な状況にある。このけやき教室とは、不登校の小中学生が通う教室で、子どもたちに安心できる居場所を提供し、学習指導や体験活動を通して学校に復帰できるよう支援している。しかし子どもたちは、常駐している指導員の方々といつも過ごしているため、環境が変わらず新たな刺激が得づらくなっている。そこで私たちが入ることで、普段あまり関わることのない大学生と接することを通して、いつもとは異なる環境で新しい空気に触れる機会を提供する。また、私たちが積極的に子どもたちと関わることを心がけてコミュニケーションを取ることで、一人ひとりの社会復帰を後押しできるようにする。昨年と同様にイベントという形で、今年は指導員の先生方や子どもたちとともに浦戸諸島の桂島に行くというプログラムも実施した。具体的には、午前中に漁業のお手伝いをし、午後は海水浴場で遊んだ。このイベントを企画した理由としては、普段屋内にこもりがちな子どもたちに対して、自然と触れ合い体を動かす機会をつくること、塩竈市の自然の美しさを知ってもらうことをねらいとした。

スタッフの所感

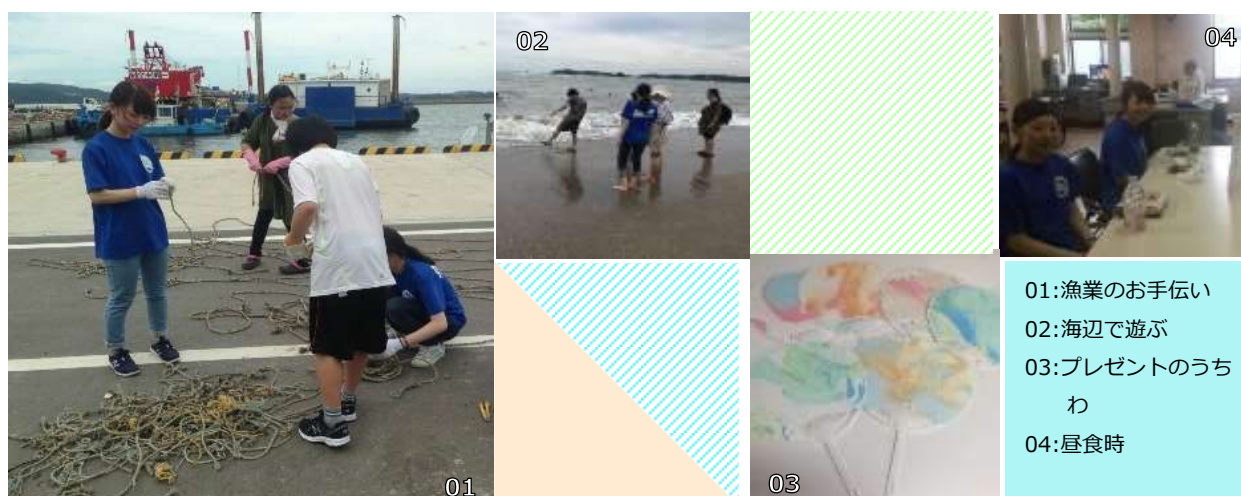
今回は日程の都合でけやき教室での活動は3日間のみであり、また子どもたちも少なかったことから難しい活動であった。しかし、その分不登校問題の厳しい現実や先生方の日頃からの苦労や奮闘を垣間見ることができ、考えることの多い活動となったとともに、だからこそ何か少しでも役に立ちたいという思いが以前に増して大きくなった。漁業のお手伝いでは地元の漁師さんの指示のもと、牡蠣の養殖に用いるロープの整理を行った。単純作業のため子どもたちが興味を持ってくれるか危惧していたが、予想に反して黙々と作業に取り組んでいたのがとても印象的であった。午後の海水浴場でも、波打ち際ではしゃいだり砂浜で楽しそうにしている姿を見ると、イベントを計画して本当に良かったと思った。また、子どもたちは普段は自宅とけやき教室など屋内で過ごすことが多いため、浦戸諸島の豊かな自然に触れたことで、気分転換や興味・関心の幅を広げるきっかけに繋がったと感じる。

参加者の所感

塩竈プロジェクトのけやき教室の活動は考えさせられることの多い貴重な経験となった。児童、生徒の不登校は対処方法に正解はなく、成果も見られにくい点で難しい問題であると実感した。活動する中でけやき教室の職員の方から、けやき教室の現状や県、市町村の取り組みに関する話を聞いたことは、生の声が聴けたという点で活動に参加する意義を実感できた。職員の方の話によると、地域によって不登校への考え方が大きく異なるのだそうだ。勉強に遅れがなければ不登校には陥らないというものと、不登校の子どもたちにはまずけやきに来て徐々に外に出られるようにしていこう、という2つである。それを聞いて、どちらにも一理あると思いつつ、しかしその結論にはいずれも子どもたちに元気に学校へ通ってほしい一心で出されたものだとも感じた。

今後の展望

今回校外学習のような形で、教室以外の場所で活動を行ったのは初の試みであったが、普段とは異なる経験を子どもたちにしてもらえたのは大きな収穫であったと感じている。参加したメンバーからも、このように外へ出かけることは有意義な経験になるという声が多く挙がった。また、先生方から不登校の子どもたちは興味や関心の幅が非常に狭いという話もお聞きしたため、身をもって様々な体験をすることでまずは「知る」という経験から、それが発展して興味・関心にも繋がるのではと思う。したがって、今後も外に目を向けたイベントを計画できたらと考えている。活動時期についても、例年夏休み以降に不登校の子どもたちが増えることをお聞きしたため、夏休み以外にも活動することも視野に入れていきたい。



漁業支援

活動場所：浦戸諸島野々島、桂島

活動期間：第1陣 8月11、12日

第2陣 8月15、16日

活動人数：26名



活動内容・背景

古くからマグロや牡蠣、海藻など様々な水産業で栄えてきた塩竈市であるが、震災の影響により漁業従事者は大幅に減ってしまった。また作業場所がある島でも、現在では居住者は減ってしまい高齢率も高い。ホヤに関しては震災以降韓国への輸出が滞っているため、大量の廃棄処分を余儀なくされている。そうした販路の確保や担い手不足から、一人ひとりの漁師さんがこなす仕事は膨大であり、漁業は1年を通して様々な作業がある。

そこで、短期間ではあるが少しでもその負担を減らしたいという思いから、この活動を初年度から続けている。毎年この活動では、牡蠣やホヤの養殖に関わる作業を行ってきた。昨年はホヤの養殖において重要な道具である、採苗器作りのお手伝いなどをした。そして今年は、不要となった牡蠣の殻が山積みになったものを、作業の邪魔にならない場所へと移動させる作業を行った。また、ホヤの養殖に用いるロープの整理を行った。不要になった牡蠣の殻は機械によって砕かれ、ベルトコンベヤーに乗って流され3メートルほどの山となっていた。作業内容は、山の手前に大きな板を敷き、そこからスコップで殻をすくい一輪車に乗せて運ぶ、という単純作業であった。計4日間の活動で、殻の山をすべて移動させた。

スタッフの所感

漁業と言えども、海に出たり生き物に触れるだけではなく、その準備段階や後処理にもかなりの作業量がある。それは毎年の養殖作業のお手伝いで私たちも痛感している。だからこそ今回のような実質的に負担を軽減できる作業こそ、今後も続けていきたいと思える活動であった。

また、島に住み島をよく知る漁師さんに船で案内していただいたことは本当に貴重な体験であり、浦戸諸島をもっと好きになれる素敵な体験であった。そして浦戸諸島の景色が自然によって日々移り変わっていくものであることや、自然と共存してきた島民の方々の暮らしを伺うことができた。

参加者の所感

経済復興の活動は漁業支援活動の他に、農業支援や島の草刈りなどをしたが、漁業支援活動が1番体力的にきついものであった。しかしこの単調できつい作業を島の高齢の方々が数人でやっていると思うと、我々ボランティアにきた若者のパワーはまだまだ必要であり、継続的な活動が必要であると感じた。本来2日かかる予定の量を1日で終えたことに漁業関係者の方がとても驚いていた。その表情を見た時にボランティアの意義を感じた。

今後の展望

毎年様々な作業において塩竈の牡蠣やホヤに触れているが、いざ出来上がった状態のものを私たちが見ることは少ない。桂島で毎年11月に行われる牡蠣祭りでは、焼いたり料理にしたりと様々な形でその味を堪能することができる。ボランティアとして訪れ活動することも続けていく一方で、自分たちが携わったものをそういった形から改めて見ること、観光としてただ訪れることも重要だと感じている。今年は桂島では牡蠣祭りは行われなかったようだが、昨年までは牡蠣祭りにも数人でお手伝いに行っていた。今後は夏の活動を漁師さんたちにとってより有意義なものにしていくとともに、マグロや牡蠣、かまぼこなど多くの海の幸が味わえる塩竈に、冬にも足を運び1年を通して漁業を知っていきたい。



右写真：
作業後の様子

左写真：
作業前の殻の山



01



02



03

01:船にて
02:作業の様子
03:島の海

農業支援

活動場所：浦戸諸島寒風沢島

活動期間：第1陣 8月8、11日

第2陣 8月15、16日

活動人数：26名



活動内容・背景

寒風沢島には浦戸諸島で唯一の田んぼがある。5年前の震災により堤防が壊れ、田んぼもひどく塩害を受けた。しかし県に除塩作業をしてもらい、現在でもなお浦戸アイランド倶楽部の方々が手入れをしている。また、塩竈の地酒として有名な日本酒『浦霞』を製造・販売している株式会社佐浦にお勤めの方も、時々訪れて共に手入れをしている。株式会社佐浦では、この田んぼでできた稲から作られる『寒風沢』という日本酒も販売している。

一般的な田んぼに比べると耕地面積は大きくないが、毎日稲の分まで土の養分を吸って生え続ける雑草の処理は、数人で行うにはとても大変な作業である。そこで昨年同様、私たちが少しでもその負担を減らせればと思い、草刈りの作業をお手伝いした。

また、浦戸アイランド倶楽部の方々が主催となり、寒風沢島について考えるイベントも行った。私たちが2チームに分かれ島を1時間ほど歩き、それぞれが見つけてきた魅力や発見したことについて発表し、全体で「寒風沢島の魅力とは？」という議題でディスカッションを行った。

スタッフの所感

今年は浦戸アイランド倶楽部の方々に加え、その田んぼでできた米から作られる日本酒『寒風沢』を製造している株式会社佐浦の方と初めてお会いし、寒風沢島や田んぼについてたくさんお話ししていただいた。収穫した稲のほとんどを『寒風沢』に使っており、年間2万本ほど生産しているそうだ。島で稲を育てることの難しさについて知ると同時に、自然の中で農薬をできる限り使わずに育てた稲から出来る『寒風沢』に、もっと多くの関心を寄せられないかと感じた。

また今年は、浦戸小・中学校の授業が一環として田植えをしたところがあり、その部分も草刈りをした。これまで、東京で生活している私たちが田んぼに入り作業することについて、とても貴重な経験であり第一次産業について考えるきっかけとなることを重視してきた。実際に今年は、寒風沢島の魅力や活性化についてディスカッションも行ったため、そういった活動や寒風沢島のPRとなることを、浦戸小・中学校の子どもたちと共にできたら良いと思った。

参加者の所感

農業支援の際にいただいた言葉で、非常に印象的だったものがある。「ボランティアという概念にこだわらず、珍しい体験をして島を好きになってもらいたい。」この言葉は私の経済活動に対する想いをがらりと変えた。草刈りという作業を通して自分がどれだけ役に立てるかということだけではなく、この先も自分が継続してできることをもっと大切にしていこうと強く思った。塩竈ではボランティアをしているはずが、得るものの方が遥かに大きい。その分はこれから、塩竈を大好きな気持ち、ボランティアに参加する意義を伝えていくことで少しずつ返していきたい。

今後の展望

昨年に続き2年目となる活動であったが、今年は草刈り作業だけではなく寒風沢島について深いディスカッションを行えたことに、活動の進展を感じている。寒風沢島に何度か来たことがある人、活動が2回目となる人、初めて訪れる人、東北で生まれ育った人、東京や離れた地方で生まれ育った人、様々なメンバーが集まっている私たちだからこそ、初めて訪れた観光客としての視点、実際に島で活動し知識を得た上での視点、様々な視点を持ち、今後の寒風沢島について考えていくことができると思う。そしてそれは、寒風沢島にとっても今後の私たちの活動にとっても必要である。田んぼの草刈りという1つの作業から、より寒風沢島に寄り添った活動へと展開していきたい。



01:休憩中の様子
02:ミニトマトを収穫
03:作業の説明を聞く

PR動画

活動場所：浦戸諸島、塩竈市本土

活動期間：第2陣 8月15、16日

活動人数：4名



活動内容・背景

この活動は、学生の目線から塩竈市の魅力を発信するということを目的としており、今年で3年目となる。2014年度には、日本でも有数の生産地であり、日本一奪還を目指している「蒲鉾」、2015年度は「海産物」をテーマに、いつも多くの市民や観光客で賑わっている仲卸市場、そして人口当たりの店舗数日本一の寿司屋などを取材し、動画を作製した。そして今年度は、浦戸諸島の豊かな自然をPRしたいといった昨年野々島で行った報告会での市民の方々からのご要望にも沿い、「浦戸諸島」、そして奥州一ノ宮であり、塩竈市にとって中心的存在である「鹽竈神社」の2つをテーマとして選んだ。活動1日目は、浦戸諸島を舞台にしての撮影を行った。浦戸の自然の良さが伝わるような動画を撮影することにこだわった。そして2日目は鹽竈神社と、その門前町にあるおさんご茶屋・菓匠榮太楼・阿部平かまぼこ店・太田與八郎商店の各店に取材させて頂いた。門前町を含めた鹽竈神社一体の魅力を伝えることを第一に考え、撮影を行った。また、昨年に引き続き、塩竈市民の方々にご協力頂き「塩竈の良さ」についてインタビューを行い、青学生の声と合わせて動画を作製する試みをした。2日とも取材にあたっては事前に宿舎で準備を行い、どうすれば塩竈の魅力を動画で伝えることができるか、ということを話し合った上で撮影に臨んだ。

スタッフの所感

この活動が始まった3年前からこの活動に携わらせて頂き、塩竈市の魅力を動画にしてきたが、とても魅力のある街であり、どれだけ動画を作っても素材が尽きない。今年はマリナーゲートからの津波避難デッキが完成したり、桂島の海水浴場が多くの人で賑わっていたりと、3年前に初めて活動した時よりも着実に復興を遂げていることをこの目で感じる事ができたことが何より嬉しかった。

このPR動画活動をしていて強く感じるのは、塩竈市民の皆様と私たち青学生との繋がりである。2012年度から活動をさせて頂いている中で築きあげてきた塩竈市民の皆様との繋がりには非常に強いものであり、私たちを受け入れてくれる皆様の温かさとこれまで活動されてきた先輩方の想いを強く感じた。この活動は、取材に協力して下さる方々がいらっしやって初めて成り立つものである。活動にご協力頂いた方々に感謝すると共に、一人でも多くの方に塩竈の魅力を知ってもらえるよう発信し続け、塩竈のさらなる発展に尽力できればと思う。

参加者の所感

震災から5年以上が経過し、復興の形も年々変わりつつある。ソフト面での復興として、塩竈に於ける生活者や観光客の増加を目的とし、学生目線で塩竈の魅力を発掘する過程で、これからの文化的ニーズや歴史的意義を考えることの重要性に気づいた。撮影時は、対象物の自然としての価値や特異性を見極めることが必要であると感じた。取材撮影の場合は取材対象者へのマナーを心がけるとともに、スムーズに行えるような提案などのフォローが大切だと思った。また、PR動画作製の活動は経済的な支援だけではなく、塩竈と私たちの心を繋ぐ役割があり、ソフト面での復興のひとつの形ではないかと思った。

この活動は、学生目線から客観的に塩竈を見つめ、そこで気づいた独自の良さや魅力を学生なりに意味づけしていく過程が大きいと感じる。だからこそ発信していく立場としての責任感も伴うが、一番塩竈の方々の人柄や街の姿、自然の美しさに触れることのできる活動なのではないか。大学生の私達が地域のためにできることは、地域の魅力を発信することだ塩竈の魅力を年々増して感じる私たちだからこそ伝えられることがあり、その魅力も伝え方一つでより良いものにすることができると思う。そのためのお手伝いができていれば大きな喜びである。

今後の展望

今後はこれまで作製したものも含め、動画の放映・発信に力を入れていく。具体的には、塩竈市からの協力を得て、観光物産協会ホームページでの配信を行ったり、観光物産案内所でのモニター上映、また復興支援の協力を得ている自治体間の交流イベントでの上映を行う。また弊社団体としては、FacebookやTwitter、ブログ等を通じて発信したり、同窓祭や青山祭といった学内イベントで放映していく予定である。



01:御釜神社にて
02:おさんご茶屋さんの五色団子
03:取材したお店にて



陸前高田プロジェクト

Rikuzentakata project

実施期間

2016年3月7日～3月11日

8月4日～8月13日

福祉支援(思い出の品)

活動場所：思い出の品返却会場

活動期間：3月9日～10日

活動人数：3名



活動内容・背景

東日本大震災による大津波で流されてしまった私有物を瓦礫や泥の中から探し出し、洗浄した後に元の持ち主に返却する施設、「思い出の品」で2日間に渡って活動を行った。思い出の品返却会場でのボランティアは2011年からさせていただいており、今年で6年目となる。初年度は、写真の洗浄、洗浄した写真をアルバムに移す作業を行っていたが、今回の活動では津波によって持ち主の元を離れた掛け軸の砂や埃を払い、探しに来た方が分かりやすくなるように番号をふり整理する作業を行った。中には体力のいる作業もあり、職員の方からも来てくれてよかったとの声をかけていただいた。初年度から活動内容は徐々に変わって来てはいるものの、思い出の品には津波で流されてしまい持ち主がわからなくなってしまった写真が現在も届いており、コンテナに保管されている写真は70,000枚にも及んでいる。震災から5年半という時間の経過だけが復興への一歩になるわけではないことをこの活動を通して知り、大切な「思い出」が探している方々のところへ戻るようにという想いで活動を行った。

スタッフの所感

私が思い出の品返却会場でお手伝いをさせていただいたのはこれが2回目だが、コンテナにお邪魔するたびに保管されている写真の莫大な量に驚かされていた。思い出の品で保管されているのはただの写真ではなく、誰かの大切な思い出である。中には、生まれたての赤ちゃんが写っていたり、成人式の記念写真であったり、かけがえのないものがたくさんある。それが70,000以上もあると知り、少しでも早くその思い出が持ち主の元に戻ることを願いながらお手伝いをさせていただいた。震災を思い出するのが辛くて、写真を探しに行きたいけれどまだ難しいという方もいらっしゃるってお聞きした。そのような方たちの為にも、少しでも長く思い出の品が続いてほしい。そして、陸前高田から東京に移った方々に向けて私たちができることを思い出の品返却会場の職員のみなさんと共に模索していきたいと思った。

参加者の所感

私の祖父は趣味として書道や水墨画をやっているのだが、そのことと重なり、一つ一つがどれだけ大事なもののなにかを思いながら掛け軸などを整理していた。思い出は何ひとつ同じものではなく、その人が生きてきた証拠であり、アイデンティティでもある。中には、長く水に使っていたのか、湿っていたり、砂が混じっていたりするものも多くあった。それらをできるだけきれいに保存し、いつでも取りに来ることができるようにするお手伝いをできたことは貴重な経験となった。まだまだ震災のショックから思い出の品返却会場に入ることのできない人も多くおられる中で、思い出の品が一つでも多く持ち主の皆さんの元に戻って、いつか震災前の素敵なかかけがえのない思い出がその方を勇気づけることができる日がくることを祈っている。また、復興費が削減され、思い出の品という取り組みをいつまで続けることができるかは分からないそうだ。「復興はまだまだ終わっていないのにね」という担当者の方の声が印象的だった。私自身、このような取り組みがされていることをより多くの人に伝え、ソフト面での復興が必要であることを発信していきたいと思う。

今後の展望

現在、思い出の品では少しでも多くの持ち主の目に届くように市内の美容室に写真の一部を置いている。東京での返却会も考えていらっしゃるとお聞きした為、青山学院のキャンパスを使って返却会を行えたらと考えている。現地ではなく、東京でもできる東北への支援を今後広げていきたい。また、職員の方から生活防災のお話をしていただき、東日本大震災を過去の出来事として留めるだけでなく、今後も私たちが震災と付き合っていかなければいけないということを再認識し、どう行動するべきか考えるきっかけとなった。今後も青学生の防災意識の向上を図っていくためにお話を伺っていきたい。



01



02



03

01: 整理した掛け軸
02: 中の様子
03: 外の様子

福祉支援(春・夏)

活動場所：あすなろホーム

活動期間：3月8日～10日

8月8日～8月12日

活動人数：4名(春・夏とも)



活動内容・背景

2012年度から引き続き行っており、春の活動は今回が初めてとなる。2015年度夏期プロジェクトにおいて陸前高田プロジェクトへの参加希望者が多かったことや施設側が外部からの刺激を求めているという事情を受け、春期福祉支援の実施に至った。あすなろホームは障がいを抱えた人々に対して就労の機会を提供し、就職への支援を行うことを目的としている。私たちはそのような場所で利用者の方とコミュニケーションをとり、刺激を与えることで一般就労への支援を行うことが狙いである。いわゆる災害復興支援とは少し乖離したものとも受け取れるが陸前高田市は全ての市民を巻き込んだ復興を目標に掲げており、この活動もその狙いに従ったものになっている。

具体的な活動内容としてはわかめの加工作業、地元で生産されたレタスの袋詰め、名産品である柚子を用いた菓子の作成及び販売といったような利用者の方が行う日常的な作業と一緒に、コミュニケーションをとった。いずれの活動も作業を手伝うことだけではなく、積極的にコミュニケーションをとり利用者の方により良い刺激を与えることに重点を置いた。

スタッフの所感

私自身は今回が初めてのあすなろホームでの活動であったが、職員や利用者の方から暖かく受け入れていただいたことが強く印象に残っている。また2015年度夏期活動において弊団体が作成した商品紹介のリーフレットが掲示してあり施設側と良い関係が築けていると感じた。具体的な活動として私はレタスの袋詰め作業、わかめの加工作業を中心に行った。一見すると単純な作業ではあるが初めてでは少し難しく、利用者の方から助けて頂きながらの活動であった。ボランティアとして来ている身分ではあったが逆に職員や利用者の方々と交流することでこちらが温かい気持ちになる機会を多く頂いた。

そういった気持ちに応えられるように私も積極的なコミュニケーションを心掛けた。初日より2日目、3日目と徐々に会話の量が多くなりわずかながら刺激を与えられたのではないかと感じている。最終日にはお手紙なども頂き、今回で最後にしたくないという思いがより一層強固になった。

参加者の所感

あすなろホームでの体験は、個人的にボランティアとっていいものなのか、はなはだ疑問に感じる部分があったし、また、当初の目的である、施設の利用者とのコミュニケーションをたくさんとることもままならなかったのはわたし自身のせいでもあったと感じてしまった。しかし、それでも最後には皆さんが私の名前を呼んでくれて、また来てくださいねと言われたときは、外面は笑顔だったが、内心では、少しうるんでしまった。普通に生活していく上で滅多に関わることでできない障がいをもった方と関わる事が出来たのはそれがどのように私自身の成長の証として出てくるのか分からないが、こうした縁を大事にして行こうと思った。

今後の展望

数字などで評価することの難しい活動ではあるが職員や利用者の方々からは概ね高い評価を頂いている。大学生としても障がいを抱えた方と交流する機会が貴重であり学ぶものが多くある。一見復興とは結び付かない活動のように思えるが、彼らが私たちに陸前高田のことを話してくれる様子は、とても誇らしげであり、そんな彼らに寄り添いながら継続して支援していくことが必要であると感じた。以上のことから今後も夏期だけではなく春期、冬期と継続的な支援を行い多くの刺激を大学生と施設の双方に与えられるようにしていきたい。それと同時にあすなろホームで製造している菓子の販売を青山祭で行うといったような別の角度からの支援も検討していきたい。



01:エコ平板の作業
02:販売の様子
03:わかめの葉切り

地域支援(春・夏)

活動場所：二又復興交流センター

活動期間：3月8日～12日

8月5日～12日

活動人数：7名(春・夏とも)



活動内容・背景

本プロジェクトの中心となる活動。震災から5年が経過し、ハード面での復興は進み、気持ちの面でも生活の環境の面でも変化の時期であるが、変化の時期こそ、多感な中学生、高校生の気持ちを一つ一つ大切に向き合うことのできる場所作りが大切だと考える。沿岸部に住んでいた子どもたちは現在内陸部に住み、スクールバスで登校している。交通手段が少ないため、親の送り迎えがないと子どもたちは学校と自宅の行き来で夏休みが終わってしまうことが多く、夏休みらしく子ども達同士で集まって遊んだり、一緒に勉強したりすることは難しい。そのため、私たち大学生が居場所を用意し、子ども達が子どもらしく自由にのびのびと過ごすことのできる場所を作ることが重要になっている。夏休みの宿題のサポートはもちろん、大人数で行うからこそ楽しい外遊びや、トランプなど子どもたちの思い出となるような活動を多く行った。

スタッフの所感

夏の活動では、勉強をするために用意している部屋の椅子が足りなくなり、椅子を食堂から持ってくる必要があるほどたくさん子どもたちが地域支援に参加した。教育支援で関わった子どもたちも何人か来てくれて、輪を広げることができたのではないかなと思う。また、期間中、すいかやかき氷と一緒に食べたり、お祭りを一緒に見学したり、普段はなかなかできない夏らしい思い出を作ることができた。中学生達からも「夏らしいことがたくさんできて嬉しかった！」との感想をいただき、子ども達の居場所としての役割も果たせたのではないかなと思う。現地の方からは、子どもたちが成長できるチャンスを作ってくれてありがとう、との声をいただき、これからの陸前高田を担っていく子ども達の一步踏み出す力となれていれば、とても嬉しいことだと感じた。

お祭り支援

活動場所：うごく七夕まつり「松原組」 山車格納倉庫前

活動期間：8月5日～7日

活動人数：7名



活動内容・背景

プロジェクトの活動として実施したのは今年からであるものの、青学卒業生で引き続いて行われてきた活動の一つである。山車を華麗に装飾し、太鼓と笛の音とともに高田町内を練り歩く「高田町うごく七夕まつり」と、太鼓の乱れ打ちとともにロープを引っ張りあい、杉の丸太が括りつけられた山車をぶつけあう「気仙町けんか七夕まつり」は900年以上前から続く、陸前高田の伝統的なお祭りである。

うごく七夕まつりに使う山車は、東日本大震災の津波の影響で全11基が一時、2基にまで減少した。山車の減少はお祭り自体に影響を与え存続は危機的状況だったが地元住民の方々の強い想いを背景に、現在は9基の山車が再興され、お祭りの伝統は引き継がれている。

今回、プロジェクトの中に陸前高田の伝統的なお祭りに参加する活動を取り入れることで、より地元住民の方々の「想い」や「絆」を感じ、スタッフ・参加者の活動への意識をより深いものにし、より間近に伝統を感じることによって、新たな方々との「輪」を築きながら一人一人が「つながり」を大切にしていくことを目的として活動を行った。

うごく七夕まつりの支援として4月から定期的に山車の装飾の一部として利用する「アザフ」を折るお手伝いを東京にて行った。また、実際に現地では、山車の装飾設置のお手伝い、お祭り当日の山車運行のお手伝いを行った。

スタッフの所感

プロジェクトとしての初めての活動であったが、まず率直な感想として、「一人一人の想い」が重なり合っているお祭りなのだという事に身をもって実感した。

「大学・就職は首都圏だが、このタイミングで陸前高田に帰ってきて思い切ってUターンした。」と語る若い方、「このお祭りのために昨日あわてて陸前高田に来た。」と語る方、「今年から山車の上で太鼓を鳴らすことになり、少し緊張している…」と語るこどもたち…。様々な世代の方々がこの伝統的なお祭りにそれぞれの想いをかけて臨んでいることに気づき、今回お会いした方々一人ひとりの「エピソード」に触れるきっかけとなったと感じた。

今回活動をさせていただいた「松原組」ではお祭り当日に全員お揃いの「松原組Tシャツ」を着用してうごく七夕の山車を運行した。「ヨーーイ！ヨイ！」と声をかけながら真っ青な空の下で、一人ひとりの想いを乗せて山車を引くというお手伝いできたことは、プロジェクトを行うにあたっての、「想いをつなぐ」という大切なことを改めて考えるきっかけを戴けたように感じてならない。

参加者の所感

地域の皆さんを始め、一度都会に出た人も、一年に一回の祭りに予定をあわせて、参加して盛り上げていきたい、という意志がひしひしと感じた。きらびやかな山車を引っ張るという、実際にはなかなか出来ないことを体験させて頂き、感謝の気持ちでいっぱいだ。

私たちが参加した松原組は、すれ違った組に比べても人数が少ないと感じたので、今回ボランティアとして参加させていただいたことによって、人数のアシストができてよかった。山車をひっぱりながら、大きな声を合わせたかけ声、山車の上から聞こえた笛と太鼓の音、この夏の忘れられない思い出と成長となった。

今後の展望

実際に山車を引くお手伝いをさせていただいたことで、ほかの祭組に比べて人員が不足していることを実感した。また、多くの方から「作業がスムーズでありがたい!」「来年もぜひ来ていただきたい!」との声を戴き、ニーズがまだまだあることを感じ、今後の活動も継続していければと感じることができた。

お祭り支援はプロジェクトを行うにあたって、「地域の方々とのつながり」を意識することのできる活動の一つである。今後も1年に1回の伝統的な行事に参加させていただきながら、地域の方々の想いに寄り添ったプロジェクトを展開していく中で、非常に重要な活動であると思う。



- 01:短冊を準備する
- 02:夜には装飾を光らせる
- 03:地元の方は山車に乗り、太鼓をたたく



熊本プロジェクト

Kumamoto project

実施期間

2016年8月14日～9月3日

仮設住宅支援

活動場所：益城町仮設住宅

活動期間：8月15日～20日

8月29日～9月2日

活動人数：4名



活動内容・背景

益城町役場、熊本大学と合同で益城町内の仮設住宅にお住まいの方を一軒ずつ訪問し、2年という仮設住宅に住む期間にルールがある中で、退去された後の住まいの予定についてや現在の生活状況についてインタビュー形式で調査を行った。調査という名目ではあるが、仮設住宅にお住まいで不安に思うことの聞き取りや聞き手になることによるストレス解消という目的も担っていた。私たちとしては後者の目的に重きをおくことで、不安の解消や心のケアなどソフト面による支援の形を実現した。実施仮設住宅としてはテクノ団地、安永、馬水、馬水東道、木山、小池島田の6ヶ所であり、10日間のなかで約200世帯を訪問した。また、2日間のみ益城町役場にて仮設住宅にお住まいの方にお送りする資料の入れ込みの作業を実施した。活動には私たちと同様に協力という形で九州大学、自治医科大学、京都大学、佐賀大学も参加していた。

スタッフの所感

熊本大学との調査を通じて直接被災者の方と会話することによって震災の細かな詳細が見えた。調査という名目ではあったが、一人暮らしの高齢者宅など仮設に入ってからでは会話が少なくなってしまった被災者の方には話をするだけでも気持ちが軽くなったと言われ、改めて一軒一軒訪問する重要さを感じた。また、不在宅でも外に置かれているゴミや郵便受けの状況から生活の現状を考える必要もあったと思った。

いくつかの仮設住宅で聞き取り調査を行ったが、人それぞれ様々な意見があることが分かった。調査でも多かった意見だが、実際に現地で被災状況を見ると、まだまだ解体も進んでいない状況を今後の生活への不安は図り得ないと感じた。それでも私たちを温かく迎えて調査に協力してくださる方が多く、家族構成や元々の生活背景がばらばらな人々の要望ではあるが、できるだけ取り入れられて復興に向かってほしいと思った。

参加者の所感

実際は聞き取り調査といった仰々しいものではなく、被災地の人に話を伺うというものだった。私が思ったよりも、被災地の方たちは温かくこちらを迎え入れてくれた。中には家に入れてくださったり、差し入れをいただいたりしたこともあった。苦労がいろいろあると思うが、被災地の皆さんは懸命に明るく過ごしているように見えた。自分も何か嫌なことがあっても、明るく生きていこうと思った。

仮設住宅にお住まいの方々に直接お話を聞くことにより、報道をただ見るだけでは気づかなかったことを多く知ることができた。仮設住宅がどういうものか、入居された方々の生活の様子や問題点から、実際に見て考えさせられることが多々あった。初対面にも関わらず気さくに家族や趣味の話などをしてくださった熊本の方々は本当に温かく、震災から前を向いて生活しておられる皆さんに今回の活動が少しでも支えになっていれればと思う。

今後の展望

聞き取り調査は1回で終わるわけではなく、継続して行うそうだ。次回の聞き取り調査を手伝うだけでなく、今回の聞き取り調査で聞くことのできた住民の方のニーズを考えながら、今後の活動へとつなげていきたい。また、仮設住宅があるのも、今回調査した益城町だけではないため、他の地域の仮設住宅でも何かしらの取り組みを行うことができれば、と考えている。



ボランティアセンター運営

活動場所：西原村復興支援災害ボランティアセンター

活動期間：8月14日～9月3日

活動人数：8名



活動内容・背景

短期でのボランティアは多く訪れているが、それを受け入れる運営側の人数が震災の経過とともに減少傾向にあった。また、9月からボランティアセンターの移転が予定されていたため、その引っ越しの作業に人手が必要となっていた。西原村ボランティアセンターでは3週間にかけて活動を行ったが、1,2週目はボランティアセンターの運営、3週目は主に9月に移転するボランティアセンターの引っ越し作業にそれぞれ異なった活動を行っていた。1,2週目のボランティアセンターの運営は総務、資材係の2つの内容を実施した。総務では電話でボランティアの受付や災害派遣等従事車両証明書の申請理由の確認、依頼を受けたボランティア内容をニーズ票に記入やボランティア活動証明書の発行も行った。資材係では主に、活動現場で必要とされる用具や装備品の貸し出し、在庫の管理を行った。また、ブルーシートや土のう袋などの消耗品を必要としている住民の方々へそれらを提供する際の受け付け等も実施した。3週目は本部の引っ越し作業が主な活動となった。移転先の施設の片づけや、本部が貸し出す作業用資材の運搬、支援物資の整理・運搬などを行った。作業の合間を縫って、実際のニーズ現場での作業も行った。震災後から放置されていたがれきの仕分けや集積所への運び出しを行った。最終日には新しい本部の場所を案内する看板の制作と設置を行った。

スタッフの所感

当時のままと思われる道路や建物を目の当たりにし、衝撃を受けた。連日全国から多くの人々が西原村へ集まっており、ボランティアを運営する人々を支える必要性を強く感じた。

支援は家財運搬など可視的なものが多く、復興の道のりは長期に渡ると感じた中、現状を住民の方から伺い、現場の補助を行ったことは、微力ながら復興の第一歩の力となれた点や新たな課題を考える点で意義があった。

今回の活動の中で、災害ボランティアセンターの運営に携わらせていただくことによって、今後首都圏などで災害が起こった際にも、自分たちが主体的に復旧・復興に携わっていくための良い経験となった。

参加者の所感

瓦礫撤去や清掃などの活動をするものだと思っていた私にとって、今回の熊本ボランティアはまた違った経験となった。また熊本出身の私にとっては、県外から来て活動される方々に本当に感謝の気持ちで一杯だった。

倒壊した家屋や山積みになっている物資などを目の当たりにし、現地の方が本当に必要としていることは何か？ということを経験し活動していく重要性と、ボランティアセンターの果たす役割の大きさを学ぶことができた。

今後の展望

西原村復興支援災害ボランティアセンターは2016年11月30日をもって閉所したため、今回と同じような形で今後とも活動を続けていくことは困難である。しかし、今回関わった西原村のボランティアセンターは外部のNPOが積極的に運営を行っており、今回の活動でできた、そのような方たちとのつながりを生かして今後の活動を考えていきたい。

また、今回ボランティアセンターの運営に関わった私たちが、今後災害が起こっていく中で、能動的に動くことができるようになれば、今回の活動は非常に有意義なものであったと言えるだろう。



- 01: 資材の貸し出し
- 02: 電話対応
- 03: がれきを運ぶ

ユニットハウス村

活動場所：益城町ユニットハウス村

活動期間：8月14日～18日

8月29日～9月3日

活動人数：7名



活動内容・背景

私たちの活動拠点であるユニットハウス村で活動を行った。

ペットの散歩や、水やり、ユニットハウス村の環境を整備するため清掃活動なども行った。また、私たち大学生が勉強を教える時間を作り、ユニットハウスの住人の方に炊き出しを行うなど、住人同士の交流の場となるような活動を行った。

スタッフの所感

入居者は、9月の撤去に向けてだんだんと減っている印象を受けた。今回、教育支援でかわった子どもたちのご家族も、仮設住宅にすでに移動している、または移動途中という状態であった。子どもたちは、ただでさえ地震でしばらく学校に通うことができず、授業についていけないという不安を持っているのに、さらにユニットハウスで暮らしてらっしゃる大人の方々が、それぞれの荷物整理に忙しく、子どもたちに構ってられないので、かなりつらい思いをしているように感じられた。

1週間の活動を通してペットの散歩やシャワー室、トイレの清掃など主に環境整備を行った。常駐の薬剤師の方やNGOの方々だけでは人手が足りず私たち大学生が数週間でもお手伝いすることによってユニットハウスの方々にとって住みやすい環境を整えることができたと思う。さらに炊き出しを行うことによってユニットハウスの住人同士の交流の場となると同時に私たち大学生も直接交流ができ、居住者が減り話し相手が減ってしまった現状で、少しでも話し相手になることができたのではないかと思います。

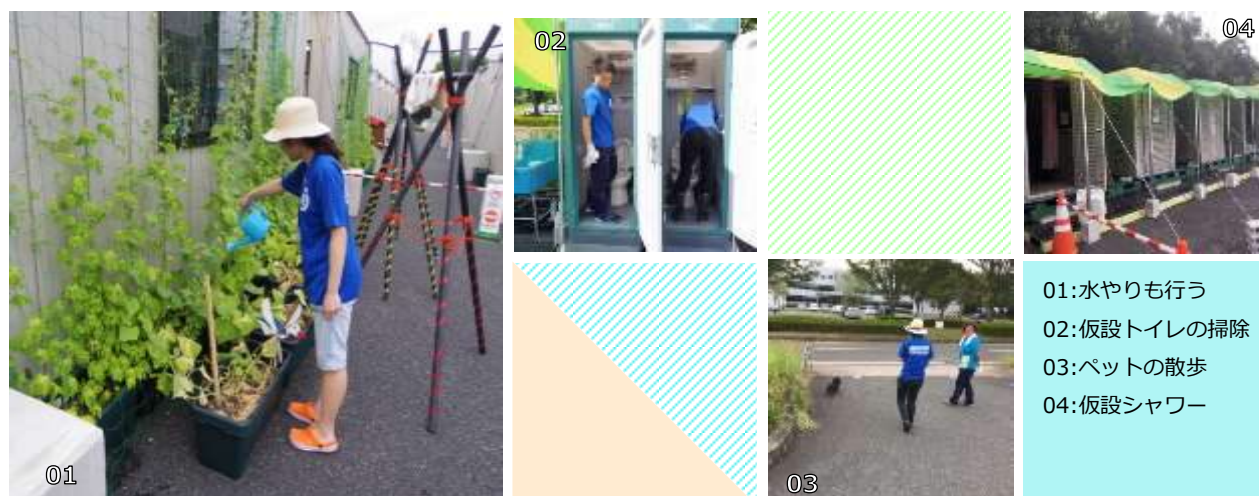
参加者の所感

地震で被災した益城町の住民の方が暮らす避難所に実際に滞在し活動したことで、今の益城町の現状を身を持って経験し、また避難している方と直接交流する機会が多く与えられ貴重な経験だった。5日間の活動の中で、避難所に居る子どもたちと多くの時間を過ごしたが、子どもたちは私達大学生が来たことに本当に喜んでくれていた。避難所の子どもたちが夏休みでも外に出かけたり友達とも離れ離れになりあまり遊べない状況の中、私達が子どもたちの遊び相手になることで少しでも元気づけられていたらなと思った。

ユニットハウス村で被災された方々と共に生活をした。避難所での良好な生活環境づくりについて、各々がどれだけ他人のことを考えられるかが重要だと感じた。共用のキッチンやトイレがいつも清潔だったり、雰囲気が明るいのはひとりひとりが自分のことで精一杯にならず、他人を想うことができているからだと思う。自分の住んでいる地域で災害が起きた場合、ユニットハウス村のような雰囲気づくりが出来ると良い。

今後の展望

西原村復興支援災害ボランティアセンターと同様に、ユニットハウス村も閉鎖されてしまったため、今後、ユニットハウス村で活動を行うことはできない。しかし、ユニットハウス村で住民の方と共に生活することで潜在的なニーズに気付くことができたため、今後の活動に役立てていきたい。





ネパールプロジェクト

Nepal project

実施期間

2016年2月16日～2月24日

ネパールプロジェクト

活動場所：ネパール カトマンズ近郊

活動期間：2月16日～24日

活動人数：4名



活動内容・背景

4月のネパール大地震を受けて、今年度はクリーンアップキャンペーン（現地の大学を対象とした通学路周辺の清掃活動）と、市役所やNGOなどへの団体訪問の2つを行った。

ネパールの都市部では、土に還らないゴミのポイ捨てが社会問題となっている。クリーンアップキャンペーンでは、土に還るゴミと還らないゴミを分別すること、学生や学校周辺の住民に対してゴミ問題を啓発することを目標とした。

清掃中は、近隣の住民が足を止めて様子を見たり、活動について尋ねたりする様子が見受けられた。また、現地学生が住民に対し、「きれいにしたから道にごみを捨てないで」と声をかける場面もあった。清掃後に行ったディスカッションでは、以前から分別方法を知っていたが、活動前の説明や実際に学校周辺を清掃したことによって理解が深まったという声が多く上がった。清掃している姿を見せることは、住民のみならず学生自身の意識の向上につながった。

NGO訪問では、大地震後のニーズは主にシェルター、食糧、医療の不足が深刻であるということが分かった。実際に地震が起きた際の対応策が周知されていないことも、問題であるようだ。

来年度以降の活動に向けて、日々変化するニーズを再調査することが出来た。

予定にはなかったが、市役所が主催しているバグマティ川の清掃に参加し、地域住民や現地学生、市役所職員、警察官とともに川の浅瀬や周辺にあるゴミを拾った。

スタッフの所感

2016年のネパールプロジェクトは転換期であったと言える。これまで既存のプロジェクトを実施してきたのみだったが、震災以降ニーズの変化が生じ改めてプロジェクトの内容を考え直す必要があった。そこで昨年度の活動では、継続的に実施してきたクリーンアップキャンペーンは引き続き行い、市役所や様々な団体を訪問し現地のニーズを再度把握した。これにより今年度からさらに地域密着型の活動実施が可能となる。団体訪問は今後の可能性の広がりを感じるとともに私たち学生団体としてできることの限界をも感じた。もどかしさはあるが私たちにできる限りのことを今後も実施していこうと考えている。

スタッフの所感

クリーンアップキャンペーンでは、スタッフの人数が参加学生に対してかなり少なく運営がうまくいかない瞬間もあったが、実施後のディスカッションで私たち、そして現地学生にとっての今後の明確な課題を見つけることができた。また現地団体訪問では、幅広い分野の団体でお話を伺ったことで、今まで取り組んできたゴミ問題や衛生環境だけでなく、貧困や女性の人權、食糧不足を始めとするニーズをより具体的に把握することができた。

地震から約1年が経過していたが、まだまだ復興は進んでいないように感じられた。一方で、地震で大きなダメージを受けても、前を向いて歩んでいる現地の人々の力強さを間近で感じることができた。日本にはないネパールの良さを知ることができた。

今後の展望

今後は現地の高校生ともクリーンアップキャンペーンを行いたい。また、今まで活動を実施してきた学校を再度訪れて、活動の効果が継続されているかを確認し、さらに多くの生徒への啓発活動が続ける。

団体訪問では、現地のニーズを改めて把握することができた。その中でも、貧しい子どもに昼食を提供しているNGOとは、食事前の手洗いを習慣化して感染症の予防をめざす企画ができそうだ。彼らと協力し、昼食配膳の前に衛生教育を行いたい。

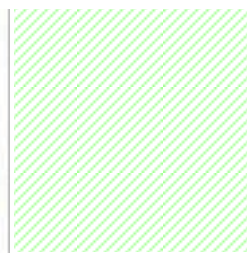
来年度以降は一般参加者の募集ができるように準備を行っていく。



People participating in the Bagmati River Clean-up Campaign in Bunsowari, Kathmandu, on Saturday.

Time now for economic

01



02



03

01:活動が現地の新聞に掲載された

02:NGO訪問の様子

03:分別したゴミ



インドネシアプロジェクト

Indonesia project

実施期間

2016年8月22日～9月2日

インドネシアプロジェクト

活動場所：ジャワ島西ジャワ州デポック市

活動期間：8月22日～9月2日

活動人数：8名



活動内容・背景

今回は、防災・衛生・栄養・喫煙・日本語をテーマとした教育支援を行った。

まず防災の授業では、地震大国にもかかわらず地震に関する知識が欠けている現状から、授業を行おうと考えた。そこで、地震のメカニズムを伝えた後、子ども達の家の見取り図をスケッチしてもらい、そのスケッチから身近な地震の危険について考えるという授業を展開した。衛生に関する授業では、感染症が懸念されている背景から、手洗いについての授業を行った。具体的には、デンプンをバクテリアに見立て、ヨウ素液をつけることで視覚的に手の汚れ具合を認識する実験を行った後、全員で手洗いの手順を確認した。栄養の授業では、栄養バランスの知識が欠けている現状から、糖尿病の危険性等を伝えた後、砂糖含有量当てゲームを用いて栄養バランスに関する知識を深める授業を行った。喫煙の授業では、たばこの危険性を知らず、幼い頃から喫煙してしまう子が多いことから、授業では人形劇等を用いて喫煙の危険性を伝え、喫煙を促された際の断り方を考えた。最後に日本語の授業では、日本について知ってもらうため、カルタをしたり、日本語の挨拶を教えたり、自分の名前を平仮名で書く練習をしたりした。

スタッフの所感

今年度私たちは前年度活動を行った5人に加え、1人の新スタッフを加えた6人のスタッフでプロジェクトを行った。昨年度とは活動内容が大きく変わったため、企画や準備段階から試行錯誤を強いられる毎日であった。特に今年度からの試みである一般参加者募集は、これまで先輩方が作りあげてここまで引っ張ってきてくださったプロジェクトを成功させるために大きな意味を持つものとなった。今年度のプロジェクトを無事に終了することができ、成功へと導くことができたことは、私たちに大きな充実感と達成感を生み出した。今年度私たちの得た経験と知識を来年次の活動にも生かすことが出来れば、と思う。

また現地の方々/インドネシアの方々は私たちを受け入れてくれ、現地の人々の温かさ、親切さに直に触れることが出来た。たくさんの方々と出会うことができ、素晴らしい活動になったと思う。

参加者の所感

今回、慣れない現地の環境や生活の中での活動となり不安な点や苦労した点、そして何より文化や習慣の相違点を感じるものがたくさんあり、このことを現地で身をもって経験することとなった。活動をしていく中で、自分たちは日本人であることを深く自覚する機会がたくさんあり、日本人であることを誇らしく思うと同時に、日本についてもっと知らなければならないと感じた。また、国境を越えた相互理解にも繋がるきっかけを得られたり、相手を感謝しあう関係を築くことができたり、たくさんの学びと幸せな時間を頂けた。さらに、インドネシアの人々の親切さや子供たちの笑顔からは、たくさんの元気をもらった。これからのプロジェクトの存続を願うと共に、今回の活動を今後の人生に活かしていきたいと思う。

今後の展望

インドネシアプロジェクトは、今後も引き続き教育支援を行っていきたいと考えている。内容は、まだ確定ではないが、防災に関する教育は続行し、栄養・喫煙・衛生に関しては、授業を行う意義を再確認し、授業内容を練り直した上で継続するかどうかを判断したいと考えている。また、来年度から新たにキャリア教育や、日本文化について知ってもらえるような授業を導入することも検討している。





フィリピンプロジェクト

Philippines project

実施期間

2016年8月19日～9月4日

フィリピンプロジェクト

活動場所：フィリピン シキホール島

活動期間：8月19日～9月4日

活動人数：7名



活動内容・背景

シキホール島の小学校20校を訪問し、約2000人の子どもたちを対象に異文化交流の機会提供・教育支援活動を行った。活動地は小さな島であり、そこで暮らす子どもたちは普段の生活の中で外国人と触れ合う機会がなくインターネット環境も充実していないことから異文化を学ぶ機会がない。そこでソーラン節や折り紙・腕相撲などの日本の遊び、日本にちなんだクイズを行い、日本文化に触れてもらった。最終日にはこれまで5年間教えてきたソーラン節の集大成として島中の小学校対抗でソーラン節大会を行った。また島の小学生が一堂に会する機会を生かし、学校の垣根を超えひとつの絵を制作した。

そして、現地の小学校は教育環境が決して十分とは言えない。理科の実験に関しても普段は高価な器具の不足により実験を行うことが難しいため、今回は子どもたちの身の回りのものから製作し、実演した。また、昨年活動時に校庭にゴミが多く落ちていたことに着目し、今年度新たな取り組みとして環境教育を行った。絵本『海と空の約束』（協力：海と空の約束プロジェクト）をもとにディスカッションを行い、環境を守ることの大切さを見直してもらった。さらにスタディツアーとしてXPプロジェクトでパソコンを提供したシキホール州立大学や小学校の授業・休み時間の見学を行ったり、昨年も好評だった鍵盤ハーモニカ講習会を70人以上の先生を対象に行い、フィリピン国歌を弾けるように指導したりした。

スタッフの所感

今回は日程の都合でけやき教室での活動は3日間のみであり、また子どもたちも少なかったことから難しい活動であった。しかし、その分不登校問題の厳しい現実や先生方の日頃からの苦労や奮闘を垣間見ることができ、考えることの多い活動となったとともに、だからこそ何か少しでも役に立ちたいという思いが以前に増して大きくなった。漁業のお手伝いでは地元の漁師さんの指示のもと、牡蠣の養殖に用いるロープの整理を行った。単純作業のため子どもたちが興味を持ってくれるか危惧していたが、予想に反して黙々と作業に取り組んでいたのがとても印象的であった。午後の海水浴場でも、波打ち際ではしゃいだり砂浜で楽しそうにしている姿を見ると、イベントを計画して本当に良かったと思った。また、子どもたちは普段は自宅とけやき教室など屋内で過ごすことが多いため、浦戸諸島の豊かな自然に触れたことで、気分転換や興味・関心の幅を広げるきっかけに繋がったと感じる。

参加者の所感

自分の力なんてちっぽけで人のためにできることなんて無い、そんなネガティブな感情も活動を通じて変化していき、今では、求められていることはたくさんある、問題は自分に動く意思があるかどうか一歩を踏み出す勇気があるかどうかだ といった想いを抱くことができるようになった。自分たちにとっても、現地の子どもたちにとっても一生に一度しか訪れないかけがえのない時間をどのように過ごすべきか日々メンバーと考え行動し続けた日々と、子どもたちからもらったたくさんの笑顔は私にとっての宝となった。

あっという間でとても充実した17日間だった。言語、文化の違いを乗り越えて、子どもたちに喜んでもらえることは何か、私たちにできることは何かを考えて行動できた。目で見える何かを与えられたわけではないけど、私たちが行ったことで、子どもたちが少しでも環境に気をかけるようになったり、科学の力でできることがたくさんあることに気づいたり、日本の文化に興味を持ってもらったりできていれば嬉しい。

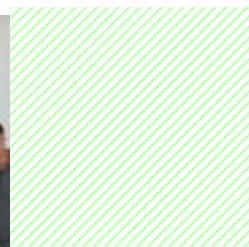
今後の展望

フィリピンプロジェクトは今年で5年目となる節目を迎えた。これを機会に来年度の活動地、時期、内容を一新する見通しである。そのためもう一度今年度の活動から見えてきたニーズを絞り出し各々情報収集に励み企画を具体化していく。

私たちは政府の大規模インフラ整備のような支援はできない。しかし私たちは心の交流という形でシキホール島に何か残せたと感じている。来年度の活動ではこれまで先輩方が培ってきた活動や想いを大切にしつつ、新たな挑戦をしていきたい。



01



03



02

- 01:集合写真
- 02:理科の実験
- 03:皆で折り紙



M4Rプロジェクト

Meal for refugees project

実施期間

2016年11月7日～11月24日

M4Rプロジェクト

活動場所：青山キャンパス17号館学生食堂

活動期間：11月7日～9日、21～24日(メニューの導入)

11月14日(体験型ワークショップ)

活動人数：7名(ワークショップ参加者：34名)

協力：IVYCS、認定NPO法人難民支援協会



活動内容・背景

Meal for Refugees (以下M4R) とは、認定NPO法人難民支援協会(JAR)が発行したレシピ本、「海を渡った故郷の味 Flavors Without Borders」から生まれた難民支援プロジェクトである。大学の学生食堂にレシピ本のメニューを導入することで、日本にいる難民についての認知を広めることを目的としている。売上金の一部は日本にいる難民への寄付ともなっている。今日、世界で急増する難民が大きな問題となっているが、日本では難民問題についての関心が非常に薄い。本学における活動は2年目であるため、今年はより多くの青学生にM4Rや日本にいる難民について深く考える機会を提供したいという想いがあった。そのため、今年度はメニューの販売期間を拡大し、新たに難民への理解を深めるワークショップを開催した。1週目は『牛挽き肉のスパイシー炒め』、2週目は『まるやかチキンカレーとココナッツミルク白玉』を販売した。合計で269食を売り上げ、5,380円を難民支援協会に寄付することができた。

新たな取り組みであった難民体験型ワークショップでは、難民支援協会の方に難民の現状についてお話を頂いた。また、参加者によるグループワークでは、日本に逃れてきた難民が日本で実際に生きてゆくことの過酷さを体験し、参加者の難民への関心は一層深まった。

スタッフの所感

昨年度の反省を生かしてメニューを2種類に増やしたり、販売日数を調整したり、味付けをより食べやすくアレンジすることで、メニューの購入者の数が昨年よりも大幅に増加したことは、目に見える成果であり喜ばしい。ワークショップは初めての試みであったが、想像を上回るほど多くの方が参加し、活動の手応えを感じた。

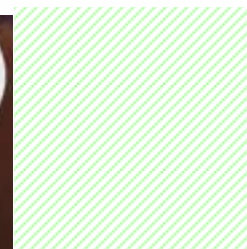
M4Rの活動は、大学生が難民に関する知識を得ることによって、日本にとっても身近な問題であるという認識を促す。しかし日本の難民認定問題を改善していくためには、難民について「関心のない」人々にも関心を持ってもらうことが必要である。これを実現し、活動を実りあるものにするためには、今後もM4Rを継続するべきであると感じた。

ワークショップ参加者の所感

- ・日本の難民認定率の低さに驚いた。自分に何ができるかはまだ明確には分らないが、今回のワークショップの機会を新たな一歩としたい。
- ・実際に現場で活動されている方の話が聞けたことがとても良かった。
- ・難民認定に必要な書類の多さが印象に残った。日本は冷たい国だと思われても仕方がない。
- ・難民として逃れてきた人が入国した後の困難に、初めて焦点を当てて見ることができた。
- ・日本人はもっと難民問題について考える必要があると思った。
- ・持続的に難民の方をサポートできる仕組みをつくるべきだと感じた。
- ・難民は経済的に貧しい人々だと思っていたが、皆がそうではないことを知り、難民に対する考え方に変化があった。
- ・難民がより身近な存在になった。
- ・難民は遠い地域の出来事であるという認識を改めたい。日本でより多くの難民が認定されるように、その方たちが「未来」を見ることができるよう、自分ができることを探したい。

今後の展望

ワークショップ開催にあたって、難民問題に精通している教授や、スーパーグローバルハイスクールに指定されている青山学院高等部とコンタクトを取り、より多くの方々に難民問題について啓発してゆく。また、プロジェクトの企画運営にも一般参加者が携わり、勉強会や広報活動に関わってもらう中で、参加者が難民問題について当事者意識を持つと同時に、プロジェクトとしてもより工夫した宣伝を行うことができる。



01:実際のメニュー
02:ワークショップの様子
03:メニューを食べてくれた学生



地域部の活動

Shibuya project

渋谷区清掃活動

えびす青年教室・GAYA

渋谷区清掃活動

活動場所：渋谷区

活動頻度：月に1回程度

活動人数：多数



活動内容・背景

青山キャンパスの立地する渋谷区の子清掃活動は、気軽に参加できるボランティア活動である。普段利用している渋谷の街に対して恩返しと愛着を持ってもらうきっかけとなるよう、2013年度より継続して行っている。開始当初はスタッフのみで実施していたが、2015年度以降は大学協力のもと、一般参加者も募ってきた。

活動内容は、事前にスタッフで下見や打ち合わせを繰り返し、効率的かつ効果的な清掃ができるようなコースを組み、青山キャンパスから渋谷駅近くの宮下公園までの範囲で何グループかに分かれて行っている。最初に全体でミーティングをしたあと、青山通り、代々木公園方面などの班に分かれてそれぞれ清掃を行う。地域部スタッフを中心に、一般の歩行者に迷惑を掛けないこと、交通ルールを守ることなどの注意喚起を行い、安全な活動を心掛けている。

スタッフの所感

暑い中でも楽しそうにはつらつとしていた参加者と共に活動でき、とても幸せな気分になった。皆さんのように都会の清掃活動に興味を抱く人を増やし、ほんの少しずつでも街をきれいにしていけるよう、スタッフとしてできることを精一杯やっていきたいと感じた。

特に私自身が最も強く感じたのは、そもそもごみを捨てる人が多すぎるということであった。渋谷区は昼夜問わず人が多いため、仕方がない部分もあるかもしれないが、郊外と比べると異常である。注意を呼びかける看板が設置されてはいるものの、シールが貼られているなどで文字が読めない無意味なものもあり、そういったところも直していかなければならないのではと考えさせられた。

参加者の所感

- ・土曜日の活動がありがたかった。
- ・スタッフの対応が丁寧で、気持ちの良い環境で活動できた。
- ・スタッフがフレンドリーで活動し易かった。

今後の展望

引き続き定期的実施していきたい活動である。具体的には月に一度ほどのペースで続けていきたい次第だ。ただし、課題はないわけではない。

例えば、広報だ。これは他の活動においても同様だろうが、活動を重ねるごとに参加者が増えてこそいるものの、ニーズを掘り起こせていない部分もあるだろう。例えば「清掃に参加したいけれど、どこでやったらいいだろうか」とか、「ボランティアしたいし、ボラステがあることは知っているけど、何をやっているかわからない」と言った層だ。これらの層へのアプローチのために、引き続き活動の広報は継続し、できるだけ早めにTwitterやFacebookなどのSNSや、ブログ、学生ポータルを使用して行っていきたい。

他にも、参加者との交流をいかにして深めていくか、また、ごみの分別についてどのようなルールにしていくか、といったことなども挙げられる。

初めて渋谷区清掃が行われた時からおよそ3年が経過した。徐々に参加者が増えたり、地域の団体との交流が増えたりしてきた一方で、未だ課題は多い。これまでの経験を糧としつつ、これからの活動を広めていけるよう、一層の努力をしていきたい。



えびす青年教室・GAYA

活動場所：恵比寿社会教育館、幡ヶ谷社会教育館

活動頻度：月に1回

活動人数：多数



活動背景・目的

えびす青年教室及びGAYAは知的障がい者の社会教育支援のための活動である。彼らはごく限られた範囲で日常生活を送っており、人的交流は家庭内もしくは職場と限定的になりがちである。そのため、より広い範囲の人と交流する場を提供することが必要だと考え、活動が実施されている。一般的に大学生は、日常生活で知的障がい者と関わることが少ない。そのため、誤った印象を持つ人が大変多く、誤った印象から差別や偏見が生じる可能性もあると考える。障がい者に対する正しい知識を持ち、理解を深めるためには、一緒に活動する機会が必要である。そのような思いを背景に、地域部は2012年から知的障がい者と交流できる福祉ボランティアを行っている。

えびす青年教室、GAYAは渋谷区を拠点としているため、地域部のミッションである「地域とのつながり」「地域社会とのより良い共生」の点に適った活動である。また、活動に参加している知的障がい者の方々(えびす青年教室教室では学級生、GAYAではメンバーと呼ぶ。以下、メンバーとする)の特徴はそれぞれ違うため、ボランティアの人数が多いことで、メンバー、ボランティア双方がより安心して活動に参加できる。

活動内容

えびす青年教室・GAYAは主にグループごとに分かれて活動を行う。アレンジを加えたゲームやダンスなどの運動、テーマに沿った料理やデザート作り、身の回りの物を利用した制作など様々な活動を行う。ペース、集中力、興味関心は、メンバーによってまたはその日の活動内容によってそれぞれ違うことから、ボランティアは様子を見ながら声をかけたり補助をしたりすることが重要である。ただし、活動主体はあくまでメンバーであるため、ボランティアはやりすぎず適度な対応をするよう注意する必要がある。

運動会、七夕やクリスマスなどの季節のイベントは、参加メンバー、ボランティア全員で行うため他グループとも交流ができる。

毎回活動後にはボランティアが反省会を行い、一日の振り返りをするとともに改善点や対応について話し合い、次月の活動につなげている。

スタッフの所感

知的障がいを持つ人たちと一緒に活動する機会がこれまでなかったため、活動のイメージがつかず不安だった。しかし、会うとすぐメンバーから積極的に話しかけたり、自己紹介をしたりしていただいた。更にメンバー同士が教えあいながら協力して取り組む姿が多く見られ、メンバー主体の活動をボランティアが補助するスタイルが互いを成長させているのだと実感した。メンバーは「知的障がい者」とされる人々だが、少しだけ話すのが苦手、少しだけ上手く自分を表現できないといった「性格」または「個性」と考えるようになった。

メンバーはそれぞれ自分のこだわりやペースの中で行動しており、一緒に活動することでボランティアの私たちも心にゆとりを持った時間がすごせると感じた。また、どんな内容にも自分なりに楽しむメンバーにつられて私たちも楽しめる活動である。

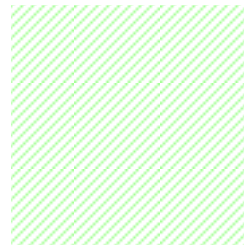
今後の展望

毎回活動後に行われる反省会では多くの意見が出されるため、反省会でまとめた意見をもとに次回までにもう一度改善方法や新しいアイデアを考え、積極的に提案することでよりよい活動に貢献できると考える。月一日の活動を継続するだけではなく、得たもの、感じたことを活かせる行動ができるかが重要である。

スタッフ・参加者ともにメンバーへの対応が分からなかったり、伝えようとしていることをくみ取れなかったりする場面が多々ある。短い時間しか会わない分、知的障がいに対する知識を地域部全体で増やし、理解する必要がある。そのうえで多くの人に参画してもらい、私たちが感じたことを広めて大学内のことだけではなく、渋谷区がどのような所でどのような人々が生活しているのか関心を持ってもらうことが、地域部にとっての今後の課題となるだろう。



01



03



02

01:音楽鑑賞の時間
02:ミニ運動会
03:一緒に昼食を作って食べる



学内の活動

Campus activities

青山学院大学同窓祭

2016年9月22日

青山学院大学同窓祭

活動場所：青山キャンパス記念館

活動期間：9月22日

活動人数：23名



活動内容・背景

AOYAMA GREEN FESTIVAL（以下同窓祭）は卒業生が組織する同窓祭実行委員によって運営され、出店やステージ発表が行われるいわば、「卒業生の文化祭」である。参加目的としては学生だけではなく卒業生にもボランティア・ステーションのことを認知していただき、同時に震災に対する風化を防ぐことが挙げられる。また、被災した企業の商品や地域の特産品を販売、広報することでわずかではあるが経済的な支援とすることも目的とする。

今年度は例年販売していた陸前高田、塩竈の商品に加え、夏期プロジェクトを実施した熊本の商品も販売した。具体的な商品としては陸前高田からはOBの方が経営されている企業の野菜や福祉支援を行ったあすなろホームのシフォンケーキ、塩竈からは特産品である魚の干物や練り物など多くの商品を販売した。熊本からは食品だけでなくOBの方が作成した写真集も販売し、被災地に少しでも気持ちを向けてもらえるようにした。商品と同時に団体のパンフレットも渡し、ボランティア・ステーションの広報にも努めた。ブースでは今年度の塩竈プロジェクトで作成したPR動画の放映も行い、多くの方に関心を持ってもらえるような工夫も行った。

スタッフの所感

私は2回目の参加であったが改めて品数の多さに驚かされた。今年度は熊本の野菜や写真集も販売したこともあり例年にない商品数であったように感じられた。また届いた商品からは現地の魅力を改めて感じられたため、より多くの方に知ってもらいたいという思いがより一層強固になった。当日は朝から強い雨が降り、どれほどの方に来ていただけるか不安の残るスタートとなったが午後には雨もやみ、ほとんどの商品を売り切ることができた。卒業生の中には熊本から来ていただいた方もいらっしゃり、関心の高さが感じられた。

現地の方に同窓祭にて商品を販売したい旨をお伝えした際に、喜んでいただけたことも印象に残っている。私たちの活動は長期休暇の期間に集中してしまうことが多いがこういった活動を通してでも信頼関係を築けたことがとても嬉しく感じた。完売したことを連絡した時もお礼の言葉をいただき、私たちの活動が力になれていると感じられた。

今後の展望

今後も多くの人にボランティア・ステーションのことを知ってもらえる活動を行っていきたい。私たちのことを知ってもらえることで、震災について考える機会につながると考えているからである。今年度は団体のパンフレットを配布したが、ブースに活動や現地の風景の写真を掲示することで私たちのことや現地のことを知ってもらえるのではないかと感じた。東京から行える支援としてもこの活動は大事にしていきたいと考えている。

販売商品一覧

【熊本】

- ・写真集
- ・野菜（ミニトマト、かぼちゃ、マコモダケ、枝豆、ピーマン、長なす、じゃがいも、地キュウリ）

【塩竈】

- ・干物（赤魚、ほっけ、イカ、吉次、さば）
- ・おとうふかまぼこ（プレーン、しょうが、お好み）
- ・生どら（小豆、栗、ラムレーズン、ごま）
- ・揚げかまぼこ（もっちりさつま、玉ねぎ坊主、いかたこ坊主、枝豆あられ、ばくだん）
- ・ずんだロール
- ・焼きショコラ

【陸前高田】

- ・ピクルス
- ・トマトジュース（アイコ、イエローアイコ、フルティカ）
- ・野菜（ねぎ、なす）
- ・シフォンケーキ（ノーマル、オレンジ、ゆず、紅茶）





卒業学年報告

Messages from graduates

卒業を間近に控えた4年生から

皆さまに感謝を込めて

友達から「お前もやろうよ」と誘われて入団した団体に、まさかここまでのめり込むとは思っていませんでした。ここまで来られたのも“やりがい”を見出していたからに他なりません。

活動それ自体にも、もちろんやりがいを見出してはいましたが、中でも3年次の学生代表の経験は、圧倒的に私を強くしました。大学と学生の言い分を調整する“中間管理職”たる学生代表の経験は、肉体的にも精神的にも負担の多い日々でありました。しかし、自分の判断や行動次第で、仲間が、組織が、活動先が、どんどん良くなっていくのを目の当たりにしてからは、どんなに辛い時でも、常に“その先にあるもの”を考え、自分のできる最大限を提供できるよう、黒子ながら全身全霊を捧げることができるようになっていました。これはひとえに、一人ひとりの学生が最高であったことや、職員や活動先の皆様からのご配慮のお陰です。この場を借りて感謝申し上げます。

私は今春から、社会インフラ関係の仕事に従事します。代表の時と同じように、社会を陰からしっかりと支え、一人ひとりが健康平安に過ごせる社会づくりに尽力していきます。

「ボランティアは社会をよりよくするための手段であり、目的ではない。」

ボランティア・ステーション(以下、ボラステ)における活動は私にとって大学生活の全てであり、自分を大きく成長することのできた充実した時間でした。東日本大震災が発生した際、私は宮城県仙台市に住んでおり、これまで感じたことない大きな揺れを経験しました。また、翌日の12日は私の16歳の誕生日であり、机の下で余震に耐えながら誕生日のお祝いをしたことを鮮明に覚えています。ボラステとの出会いは高校3年生のときに、青学のパンフレットにボラステが巻頭のページに大きく掲載されているのを見たことです。大学生でこうした被災地の活動に対して自主的に取り組んでいる姿に心打たれ、入学してすぐ入りました。

ボラステは自らによって機会を変えていくには絶好の環境でした。より効果的なボランティアを自分たちで考え企画することはもちろんのこと、メンバーが活動しやすい環境の醸成などマネジメントする資質も含め、事業を進めていく力を身につけることができました。そしてその企画を一般参加者に提供することは、活動先から感謝されることに加えて、1週間という短い期間で大きく成長していく過程に携われるという2倍のやりがいを感じられることでした。

ボランティア・ステーションという名前ですが、ボランティアはあくまで手段であり、目的ではないと私は考えています。大学生が社会をより良くするために最善の手段がボランティアであるということです。そのため今後も後輩には既存の伝統や概念などに捉われず、ベンチャーマインドを持って、よりより活動のためを実施するため、考え行動してほしいと思います。

大学に入学して以来4年間、活動関係者や大学職員の方々のご支援の下、当団体のスタッフとして、様々な考えを持った多くの仲間と議論を交わしながら活動に励むことが出来ました。所属する地域部では福祉活動や清掃活動を中心に企画運営を行い、また私自身も活動に取り組む中で、身近に存在する事柄に対して問題意識を持ち続けることの重要性を大きく感じ取りました。日常生活で当たり前になっているからこそ目を向けられ難くなっている問題は多くあり、それらに対して自身が行動するだけでなく、一人でも多くの人に伝えていく、その積み重ねによって、社会をより良いものにすることが出来ると思います。私自身がボランティアに専念するだけではなく、多くの学生に地域部の活動に参加してもらい、新たな問題意識を持ち、また如何に社会を良くしていくかについて考えてもらうことが出来たことに当団体のスタッフとして活動してきた意義を感じます。

私にとって大きな転機となったのが、1年目に参加したフィリピンプロジェクトです。途上国の状況を初めて目にし、自分に何ができるのかと考えました。しかし、途上国の人々が求めるものと私達が出来ることの間には大きなギャップがあり、そのギャップを埋められない無力さを痛感しました。自分の弱さと強さを知り、考え方や価値観が変わっていくのを実感しながら、活動を続けて参りました。

当団体のスタッフは同じように悩みながらも、活動地域にとってより良い活動を模索し続け、プロジェクトを運営しています。弊団体に身を置けたことは私にとって大きな財産です。このようなスタッフの尽力により、団体が成長・発展していくことを期待しております。

しかし、未だ至らぬ点の多い弊団体は活動地域の方々のご理解・ご協力の下で成立しております。この場をお借りして、活動関係者の方々に感謝申し上げるとともに、今後とも変わらぬご恩情を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

そのような関係の下で、弊団体が活動地域の方々に寄り添い、社会の一助となることを願っております。

私は高校2年の時に東北とは離れた千葉で震災に遭い、1度は現地をこの目で見たいと思っていました。その思いを抱き続けていた大学2年の頃、知り合いのすすめという縁があり、この団体に入りました。

それからの3年間、東北だけでなく熊本等様々な地域でボランティアをしてきました。特に塩竈や陸前高田では何度も訪れるたびに様子が変わっていくところを目にすることで、「ここの景色をまた見に行きたい」「ここのお店のこの食べ物をまた買いに行きたい」というように、その地のファンになっていました。さらに、その町で会う人々にも「また会いたい」とまで思うようになりました。その時からボランティアは「してあげる」というよりも自分たちがその場所や人から「受け取る」もののほうが多いと感じられるようになりました。今後は自分が経験してきたその気持ちをいろんな人に伝えていきたいと思います。

2015年度会計 国際政治経済学部 清水 瞳

思い返せば、「ボランティアとは何か」を自問自答する4年間でした。私だけではなく、スタッフ全員が同じように活動していると思います。答えのない問いに自分なりの理由を見つけるのは大変なことです。これはボランティアだけをしていても見つかるものではありません。後輩の皆には、肩の力を抜き、視点を高く持ち、様々なことに挑戦し、その経験を団体に持ち寄ってもらえればと思います。

さて、これまで無事に活動できたのも皆様のご協力あってのことです。関係者の皆様、活動地にお住まいの皆様、一緒に活動させていただいた青学生、先輩方、同期・後輩の皆に深くお礼申し上げます。活動に反対してもこっそり応援してくれた両親にも感謝したいです。

最後に、変化を続けるボランティア・ステーションですが、悩みながら自分達に何が出来るか模索する学生達の姿は変わりません。これからもお力添えいただければ幸いです。

国際政治経済学部 川上 渚紗

私がボランティア・ステーションの活動を始めたのは、当時の先輩の「大学生は時間があるから自分次第で大学生活が変わる、自主性が大切」という言葉がきっかけでした。ボラステに入ったことで私の大学生活は大きく変わりました。

ボラステの活動は様々な方々に支えられながら、スタッフが主体的に活動を作り上げることが出来る環境です。活動前だけでなく、活動中では毎晩遅くまでミーティングをして活動の改善をして、翌日も反省点を上げて改善させる。このことに学生時代に必死になって取り組んだことは貴重な経験となりました。現地での活動だけでなく、自然災害に伴う募金活動を行うことができたのも、ボラステの環境があったからこそできたことです。多くの方々との関わりの中で活動ができたことにとっても感謝しています。

今後は形を変えてさらなる変革を迎え、大変なことも多々あると思います。皆さんの熱い思いを生かしてさらに素敵な団体となるよう期待しています。

私が感じる弊団体の最大の魅力は、活動分野の広さです。メンバーが様々な活動に参加することで、より良い企画が立ち上がることが多々あります。例えば、海外での衛生教育活動を企画した際には、学校周辺での清掃活動の経験が大きく役立ちました。また、緊急性の高い短期的な活動と、大きな課題に対して行う長期的な活動の両方に取り組んでいる点もとても誇りに思っております。

団体での活動は、個人の成長にも繋がりました。メンバー間の話し合いでは、「何が必要とされているのか」「私たちに出来ることは何か」というテーマがいつも中心にあります。おかげで、私自身も「必要とされている役割」を積極的に担う習慣ができました。これは、社会人になるにあたって大いに役に立つ考え方ではないでしょうか。

最後になりますが、今後も弊団体が、社会にとっても学生にとってもプラスの変化をもたらす場所であるよう、心から願っております。

法学部 高橋 聖奈

私にとってボランティア・ステーションでの活動は、多くの人との出会いと貴重な経験を通して「自分と向き合う時間」を与えてくれるものでした。

私は、現地の方のニーズに寄り添った学生視点の主体的な活動を行う、という考え方に共感して国際部に入りましたが、実際に現地で活動するにつれ、学生ボランティアの現実と理想との狭間で様々な問題に直面し、迷いこむ時間も多くありました。

しかし、プロジェクトメンバーや現地学生に支えられ、又良い刺激を受けながら目の前の活動に取り組んだ全ての時間が、迷いや悩みに対する答えを見出せずとも、多くの学びや発見と共に自分と向き合う時間を与え、私の人生に大きな影響をもたらしました。今後の人生における一つの原点を、弊団体での活動を通して得たと思います。

今後も、様々な想いを持った学生が集い、ボランティア・ステーションらしい、ニーズに寄り添った活動が続いていくことを願っています。

法学部 中島 由加里

私は、大学1年生の5月にこの団体に入り、地域部のスタッフとして主に知的障がいのある方のためのレクリエーション事業のサポートボランティアに携わってきました。

その過程で、数多くのことを学ばせて頂きました。

それぞれの活動に色々な想いをもち、活動するスタッフに囲まれながら、活動先で様々な方にご協力して頂いて、青学生とボランティア先を繋ぐお手伝いをする中で、それまでどこか遠い存在のように感じていた社会問題や自然災害について真剣に考える時間を多く持つことが出来ました。この4年間の貴重な経験は、ボランティア・ステーションに所属したからこそ出来た経験であり、その経験から得られたものを糧に、社会に出ても人のために行動出来る人間でありたいと思います。

ボランティア活動を経験した友人の言葉で、強く印象に残ったものがあります。それは、「結局は相手の為になることはできないから、自分の為だと割り切って活動している」というものでした。わたしもそのように感じます。約3年と少しの活動の中で思い知ったのは、現状を変えることの難しさと自分の無力さでした。全力を出し切っても、起こせるのはほんの小さな変化だけ。けれどその半面で、同じ「志」を持った学生たちが集まり、悩み、継続的に活動することで、1人で悩んでいるよりも大きな結果を生み出せるのだとも感じました。この矛盾した気持ちに白黒つけることはできないと思いますが、これからも大事にしていきたいです。

最後になりましたが、わたしと出会い、たくさんのことを教えてくださった方々へ、この場を借りて感謝の気持ちをお伝えします。本当にありがとうございました。

そして後輩の皆さんへ、懸命に活動する姿をこれからも応援しています。

国際政治経済学部 谷田部 悠亜

「ボラステをなくす」これが私の目標でした。

私が初めてフィリピンPに参加したのは2013年。プロジェクト開始からまだ1年で、活動内容も時間も期間もすべて手探りでした。それから3年、一般の青学生もフィリピンに連れて行けるようになり、スポーツだけでなく音楽や理科も教えられるようになりました！素敵な後輩たちの努力のおかげです。

嬉しい反面、「これで満足しちゃだめだ！」とも思います。フィリピンだけでなく、日本も世界も全ての人々が笑顔になってほしい、ボランティアなんて、ボラステなんて不要なくらい良い世の中になってほしい、私はそう思いながら活動してきました。

後輩の皆さんが、「楽しい」だけで終わらずに、様々な課題と向き合っていけるよう願います。

国際政治経済学部 吉田 真弓

私が国際部に入ったきっかけは、「旅行で行く機会のない途上国に行きたい、ボランティアなんてカッコいい」と、単純でした。

私の入部時はサークルから国際部に変化していた頃で、顧問がいない中、ミーティングのやり方や現地とのコンタクト、プロジェクトの中身、すべてを学生の手で1から築き上げなければならぬ状況でした。仲間と話し合い、模索しあって、国際部を作りあげました。

現地の方との出会いや、仲間と共に悩み、迷い、邁進した日々、過ごした時間は私の一生の財産です。「僕たちは微力だけど無力ではない」と互いに実感できたことで、異文化を超えて結束力を高めました。

国際部、またボラステに関わる全ての皆様に改めて感謝申し上げます。ボラステでの経験は、私の人生観を変え、将来を導いてくれるものとなりました。

これからもボラステの形は変われど、学生の想いを行動に変える組織であることを願います。

ボランティア・ステーション学生スタッフ一覧

Members of the Volunteer Station 2016

執行部	
第6代学生代表	大山明
東北部リーダー	弘光梨奈
地域部リーダー	小島優希
国際部リーダー	能登貴一
総務課リーダー	安藤清香
広報課リーダー	星野桃子
渉外課リーダー	久保田明香

東北部		地域部		国際部	
松村悠太郎	吉澤萌枝子	春日井大貴	月岡郁	川上渚紗	大森蘭
宮澤和浩	大平沙穂	駒木根怜	吉田恵美花	小山佳奈実	岡本佳奈美
久保田明香	鏡詩織	中島由加里	秋山桃子	清水瞳	鎌田優
媚山泉	櫻井有沙	丸山万里枝	石瀬結香	高橋聖奈	杉村真優
今野友彰	茂野みさき	飯田遥	佐野真理香	三崎秋人	高橋里緒
弘光梨奈	津嶋優奈	池田もも	富田友梨子	谷田部悠亜	中村真梨
星野桃子	三森純奈	上等由貴子	三上峻	吉田真弓	西溜夏美
安藤清香	柳田泰樹	大山明	持丸雄太	青木咲	能登貴一
岡林真琴	渡辺諒真	小島優希		新井健斗	森本優里
山崎航太朗				有田理瑳	越村映里
				山崎麻由	本間健太郎
				吉川祐太	三浦万奈

青山学院大学ボランティア・ステーションを支えてくださった皆様

2016 年で活動 6 年目を迎えた本団体ですが、多くの方に支えていただき活動を行うことが出来ました。

・提携、協力団体

(塩竈プロジェクト)

宮城県塩竈市、塩竈市教育委員会

(陸前高田プロジェクト)

陸前高田ドライビングスクール、思い出の品返却会場、社会福祉法人燦々会あすなろホーム、

陸前高田市気仙中学校、Teach For Japan、二又復興交流センター

(渋谷区清掃プロジェクト)

株式会社ラフォーレ原宿、渋谷区役所

(GAYA・えびす青年教室プロジェクト)

知的障がい者恵比寿教室、知的障がい者幡ヶ谷教室

(インドネシアプロジェクト)

ジャカルタお掃除クラブ

(ネパールプロジェクト)

Food For Life Nepal

(M4R プロジェクト)

認定 NPO 法人難民支援協会、M4R 事務局、青山学院大学 17 号館学生食堂

(熊本プロジェクト)

熊本大学、特定非営利法人ピースウィンズジャパン、一般社団法人九州学び舎、西原村社会福祉協議会、

益城町役場、熊本学園大学、九州ルーテル学院大学

・寄付、助成を頂いた皆様

青山学院校友会

東京城西ロータリークラブ

株式会社 STB

(そのほかにも多くの方にご寄付頂きましたがスペースの関係上、割愛させていただきます)

・その他お世話になった皆様

(塩竈プロジェクト)

鹽竈神社、塩竈市議会議員の皆さま、浦戸諸島各地区の皆さま、NPO 浦戸アイランド倶楽部、NPO High-Five、

取材に協力していただいた個人商店の皆さま

(陸前高田プロジェクト)

高田ドライビングスクール社長 田村満様、秋山真理様

(フィリピンプロジェクト)

NGO シキホールズ・エンジェル 原田翔淑人様

編集後記

最後までお読みいただきありがとうございます。2016年の活動も無事報告書にまとめることができました。2016年の活動に関わってくださったすべての皆さまに感謝申し上げます。

2016年は、東日本大震災から5年という、ボランティア・ステーションにとって節目の年でした。3月11日には東日本大震災に関するたくさんの報道がありました。そのような報道を目にするなかで、また、自分自身も定期的に東北に訪れる中で、東日本大震災からの復興はまだまだだ、と思っていた矢先に、4月14日から16日にかけて、熊本県を中心とした九州地方は強い地震に襲われました。この報告書にも記載した通り、ボランティア・ステーションでも熊本プロジェクトを立ち上げ、何とか力になりたい、と活動を行っているところです。

学生の私たちにできることは、世の中が大きく変わるようなことではありませんが、私たちに関わる少しでも多くの人が笑顔になれるような、そんな活動を日々模索しています。

ボランティア・ステーションとして発行する報告書は、この2016年次報告書が最後となります。ボランティア・ステーションは名称を「Roote」と変え、活動を行っていきます。発足から5年間慣れ親しんできた名称が変わることは、少なからず私たちに影響を与えるかもしれませんが、私たちがやるべきこと、目指すところは変わりません。

どうかこれからも変わらずのご愛顧を賜りますよう、お願い申し上げます。

2016年度広報課リーダー 星野 桃子

青山学院大学ボランティア・ステーション 2016年次報告書

編集：広報課学生スタッフ

発行：青山学院大学ボランティア・ステーション

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25

Get More Info!

\ ameba blog /



\ Facebook /



\ twitter /



\ Instagram /



AGU-VSでは「青山学院大学 使途指定型募金・ボランティア支援活動」を通した寄付を募集しております。
詳しくは弊団体までお問い合わせください。